

がんば麗羽さん！リターン！？エターナルストーリー

髪様

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋姫、三国志演義、正史を、ちゃ混ぜにした、これまた不思議外史。恋姫世界で滅亡必至の袁家の本初さんに憑依した彼、彼女の物語。
無印→ネクスト→リターン→ネバーエンドイング→エターナルストーリー（今ここ）

小（改）で読むことをお勧めします。

袁家つてほとんど戦わないよね？しばし待たれよ、袁家の見所は官渡の戦いでありますので。
元々一発ネタ。

目

次

序章

コウを知る、つまるところの前口上 ランを知る
ランを知る
閑話 ヒトを知る
サクを知る
トキを知る
シンを知る
ホシおちる
イマは成らず

67 59 50 40 29 25 12 1

序章

コウを知る、つまるところの前口上

袁本初、その名を聞くと三国志演義を知る者ならばほぼすべての人
が無能と答えるかもしない。

だが、実際には無能であつたのか？

それは否である。

確かに、人の使いは上手いわけでもなく、噛ませ犬的な存在に映る
かもしだれない。だがしかし、史実では後には敵対したが、若き曹操以
外にも名だたる名士とも友誼を結ぶなど、人の話を聞かないことを除
けば一角の人物であつたには違いない。幽州公孫贊の白馬義徒をな
んか縄で倒してたし、優柔不斷だつたこと以外、すごいんだよ。

たぶん、きっと、そうだといいなあ

「孟徳さん、またあなたは何を企んでいるんですの？」

「あら？ ただ美しい花嫁がいるという噂を聞いたから確かめに行く
だけよ？」

あなたも気にならないかしら？」

金髪ロールの二人組、一人は豊満な肉付きの切れ目の美女、もう一
人はスレンダーでもう一人の胸元ほどの背の低い美少女。背の高い
方の女性が袁本初、かたやもう一方の女性が曹孟徳である。曹操ファン
には結構有名なエピソードである、この花嫁強奪であるが、このと
き正史？ であるなら袁紹が曹操にハメられる。

そしてやつぱりハメられた、まあ実際は彼女の勘違いなのである
が。

「麗羽、ちよつとそこで待つてくれないかしら？」

堀を乗り越え忍び込むまでは一緒だったのだが、それだけ言うと、
曹操は返事も聞かずに屋敷の奥に入していく。屋敷の中は大騒ぎ、や
れ祝いだ、酒だ、無礼講とてんやわんやなどに盛り上がり上がつていたた
め、忍び込むのは非常に簡単であった。

そして彼女は人が少ない庭園で一人ぽつんと立っていた、むしろ待

たされていた。

こんなところで待つていてどうしようと、別に俺いらないんじゃね、など内心思いながら庭にあつた池の中の鯉？とりあえず魚を眺める。するとどうだろう、どんちやどんちやしていた屋敷の中がさらに騒がしくなつたではないか。しかも喧騒はこちらに向かってくる。

「盗つたわ！逃げるわよ麗羽！」

見知った顔が人一人担いで爆走している。

顔はニヤケ、やり遂げた感が満ち溢れている。

「えつ！ちよつ待つてくださいな！」

本氣でいきなりである。

人一人抱えているので鈍足になつてもおかしくないハズの曹操は庭先にある岩、庭木、堀をぴょんぴょん飛んで外に飛び出す。このとく袁紹である彼女はまだ池の前である。

「いたぞつ！」

「花嫁を何処へやつたのだ！」

「城に突き出せ！」

「なんでワタクシが！」

少々話をそらそう。

この袁紹本初、中身は現代人学生の元男の子であつた。彼は実家から送られてきたじやがいもを食べようとし、芽が出ているのにも構わずそのまま調理。じやがいもの芽の毒にあたつて死んだのだ。そして目が覚めると赤ん坊、目の前には自分を抱く何か巨大な人。

目の前に居た巨人は自分のことを『麗羽』と呼び、あやすように抱えて揺らす。その時、彼はあまりの出来事に本気で現実逃避をしていった。しかし、結構心地がよかつたのは本人だけの内緒である。

だがそう言つて目を背けても事実というか現実は逃げちゃくれないでの、あれよあれよという間に成長した彼女。15の時には養父に字を授かつたりもしたが、この時までに必死に見なかつたことにした

現実も多々あった。袁成とか袁隗とか袁逢とか親類とか親にいたけど全部女性だつたので、

「あ、うん何かどつかで見たことあるパターンだが、きっと気のせい」

そう、そう信じて頑張ってきたのだ。

だがやつぱり何度でも言うが、現実は待ってはくれない。

郎、濮陽県長への任命。

そして育て親との死別、そこから彼はどうつかで見たことある三国志の中の袁紹のように父母それぞれ3年計6年を喪に服した。そしてその際に官も退いた。この時の喪とは儒教、前漢の時代に整えられた礼記をもとにして行われ、酒や肉さらにはこの時代の数少ない娯楽である音楽などもを断つ。

ではなぜ三年か？

子生三年、然後免於父母懷。夫三年之喪、天下之通喪也。

生まれてから三年はほとんど意識もなく、両親に唯々懷の中で抱かれ世話をされるだけに育つ、彼女の場合も意識はあつたが、まだ筋肉も未発達な体は自由に動かせなかつた。

生みの親である袁成は彼女を生んだ直後になくなつたが、代わりに彼女を引き取つてくれた叔母である袁逢、袁隗姉妹は彼女を袁術、袁基同様に育ててくれた故の感謝もあつた。

それ故に孔子が唱えた通りに、育ててくれた感謝を込め三年三年の喪に服したのだ。

（ちなみに本来は母が死んだあとに三年、そこで感じ入ることがあつたのか、その後父三年の服喪について）

本来は反董卓連合を発足した際に洛陽にいた袁家は尽く誅され、その際に袁基、袁逢、袁隗等も討たれるのだが、この世界ではどちらも流行病であつた。

で、更にその後、今度は他の親類に私塾に行くように言われ洛陽にやつてきて、花嫁泥の元凶である彼女に出会つたのだ。ちょうどこの時期には、公孫賛も洛陽に訪れており、出身地域が近いからと都での袁家の邸宅を訪問している。

当時袁紹は、張孟卓、何伯求、吳子卿、許子遠等とも友誼を結んでいた。洛陽に来てから袁紹はうつけのフリをしていたのだが、とある出来事があつたことをきっかけに上記の四名と曹操と縁を結ぶこととなつたのだ。

ある日、袁紹は洛陽の住宅街を私兵を12名ほど引き連れ歩いていた。

「しかし、ほんとに寂れていますわねえ」

袁紹が周囲を見渡せるほどに散開し周りを囲み歩く兵、少々前を2名、後ろに2名、袁紹中心に3×3の正方形に8名である。既に天子の力失せいる、先帝の散財を補填するために靈帝劉宏は官位を売却したため官は乱れ、賄賂は横行した。

なんせ曹操の父である曹嵩も靈帝に莫大な金を献上し、宦官にも賄賂を贈り太尉になつたほどである。それ故、本来都を治める役人も治安の維持などほとんどの者が行わず、自らの保身と財産を溜め込むことに集中したため、漢全土その都である洛陽ですら治安が乱れに乱れた。

「本初様、これより先は貧民街でござりますぞ」

「それで？さつさと行きますわよ」

（ちつ！何も知らない箱入りがつ！）

袁紹は馬鹿なフリをしていたため思いつきで散歩と称し街を練り歩いた、実際の目的は見回りである。そのため問題が起こりそうな場所を優先的に巡るのだ、もちろん様々なことに首を突つ込むこととなる。

目的地にたどり着けず道に迷う、おばあさんがいれば邪魔だからと称し私兵に案内させ、喧嘩があればうるさいからと仲裁させ、道端に糞尿があれば臭いからと掃除をさせる。そんな事をやらさられるモノだから当然袁紹の担当は不人気であった。

袁紹自身は目の届く範囲で自分ができる事ならやろうとバカの振りをするなら巴からしく振舞うことで、天の御使いと同じ様に警邏をしていたのだ。しかし、そんなことを知らない袁家お抱えの私兵たちは袁紹のわがままだと思つており、更に彼女の名を落とす噂を流した。

「お助けください！」これを持つていかれたら私どもは生きていけませぬっ！」

ちようど貧民街に入った時である、悲鳴が聞こえた。少々早足での場所に向かう。

もちろん、お付は袁紹がまた変なことに興味を持つて見物に行つたとしか思つていない。

「ええいつそんなこと知るものかっ！我らは法に従い税を取り立てるのだ！

貴様が生きれぬからといつて税を取らぬ訳にはいかぬのだ、貴様の言い分など理が通らぬとなぜ理解できぬ！

払えぬならば働けば良いっ！

それでも生きてゆけぬのなら、税を收め、のたれ死ねば良いのだ！

「そんな殺生なッ！」

そして渦中へと向かつていく袁紹。

「見苦しいですわよ？おやめなさいな」

「なつ邪魔をするというのかつ！獄に入れられても……なつ！」

徵稅官らしき役人の男は勢い良く声の方向へと振り返り声の主を確認すると慌て出す。独特的の髪型に独特のお嬢様的喋り方、しかもバ力と大人気（上手く取り入れば美味しい思いができるかもしけない、という勝手な想像から）な袁紹であつたからだ。しかも名門の名は伊達ではなく、都において結構な影響力を持つ。

「こ、これは袁家の袁本初殿とお見受けします、なぜこの様なところに？」

「あら？ ワタクシがどの様なところに居ても勝手ではなくて？」

「そ、その通り！ そのとおりでござりますねっ！」

ペコペこと頭を下げ手をこすり合わせる役人、先ほどとは別人と見間違うほどである。そしてそれを内心冷めた目で見つめる袁紹、だが他の人には何も考えてないようになしか見えない。

「散歩ですか」

「は、はあ……」

「先ほどお聞きになられたでしよう？ なんですのその反応は？」

「そ、そうでございますね！ 私ごときの疑問に答えていただけるとは思わなかつたもので！」

（クソがつ！ 急に話を飛ばすなよつ！ 馬鹿ばろくという噂は本当か）

「あら？ 貴方、弁えていらつしやるのですわね？ いい心構えですわ！」

なんて言つても私は名門袁家ですね、おーほっぽつほつほ！

顔では愛想笑いを浮かべてはいるが、彼女の周りにいる人間は実際には殆どの者が彼女を見下している。目の前の役人もその類にあぶれなかつた。先ほど悲鳴のような嘆願を唱えていた貧民街の住人は何が起こつてゐるのか理解できていないような反応である。学もなく文字も読めない、そんな住民にも分かることがある一つあつた。それは今自分の目の前に税を取り立にきた役人よりも偉そうな奴が来たということである。ならば彼、彼女がやることは一つ、より偉そうな奴に泣きついてみるだけである。

「ど、どうか話を聞いてくだされつ！」

役人の前より飛び出し袁紹の前に両膝を付き手のひらを組む。本来そのようなことをすればお付の私兵に切られてもおかしくないのだが、既に役人と会話をする際に彼女の後ろに下がり、辺りを警戒している為そのようなことは起きなかつた。

「ええつい！ 黙らんか！ 貴様如きが話しかけていいお方ではないぞつ！」

慌ててご機嫌とりも合わせ住民の肩を掴み後ろへと思いつ切り転がす。

住民は「ひつ！」と声を上げ起き上がるが、袁紹の、「そうですね。ちょっと貴方、汚いモノを近づけないでもらえないかしら？」

という一言で絶望の表情を浮かべる。

「あまりにも臭いですわ。

本来ならこの地区」と燃やしたいほどですが、さらに臭いが広がりそだからやめておきますわ。

連単（護衛の一人）さん、このお方にお金差し上げてくださいな」「なつ！そのようなことをすれば他の者が不平を申しますぞ！」

連単と呼ばれた彼は声を上げる、役人はこれほど馬鹿なら自分もおこぼれを確実にもらえるなど機嫌が良くなる。そして袁紹はあえて役人の思惑道理に事を運び、毎回安くはない金をばらまく。

「それなら私のお小遣いでこここの清掃でもやらせればいいでしよう？

ワタクシがいる洛陽の都にこのような汚いモノがあるのは許せませんわ！

ワタクシが住んでいるのですから、もつと相応しくなるべきそれは思いませんこと？」

はつきりといって言い方は馬鹿っぽいが、言っていること、やることは至極まともである。これはよく考えなくとも、私財を投げ打ち街を整備し、職を与えると言っているのと同義である。悪名ではあるが、広まり、治を知る者はその功を知る。

墨子に「神に治むる者は衆人その功を知らず明に争う者は衆人これを知る」、人に測り知れないように事をなす者は、人はその功績に気づかない。どんな大きい難儀も始まりはいつも小さな火種から。火種の時点ですぐに消火してしまう人は最高に優秀だが人の目には触れない、とある。袁紹はこれを知らずになっていた。されど儒家は名を尊び、これを厳かにする。

だが気づくものは気づく訳で、

「呉と申しますよ！呉子卿とでも呉とでも呼んでくだされ！でもシケイとは呼ばないでくだされ！」

貴方に聞きたき事ぞありまして、山超え谷越えやつてきました！」

「大げさね、呉子卿殿。ワタシ許子遠言うアルネ。よろしくヨ。

一言、言わせてクレヨ、カネクレ、金持ち妬ましい」

「張邈孟卓、真名は慈協ですねつ！袁本初殿の噂を聞きつけやつてきました！」

人助けバンザイですよねツ！ワタシおかしくないよねツ!？」

「とりあえず、邸の中にお入りなさいな、諸双（お付の一人）案内なさい」

彼女たちは袁紹の外聞となしたことの相違に気づき、百聞は一見に如かずということで本人を見てみようと至つたらしい。呉子卿、ショートボブで軽い茶髪、短パンチャイナである、ちなみに130ほどと背は低い。許攸、赤髪お団子、スリット入りドレスの生粋チャイナ。最後に張邈、ほとんど曹操の2Pカラーリ髪の色は銀色でドリルが付いていない、しかも若干目はタレ目である。張バクに関しては、先の貧民街の出来事に痛く感動したとかで、速攻で真名を許している。他の二人に関してはこれより少しづつ関係を深め奔走の友となるわけだが、今はまだ観察段階である。

「麗羽殿、あなたが何をなされるにしても何何んに会うべきですねつ！」

今は汝南に滞在しているそうですつ！非常に人物評価に定評がある人ですよ」

とは張邈の勧めである、そして袁術を荼化しに行くとかこつけて何顕の元を訪れる。

「漢朝は滅びんとしている。天下を落ちつかせるのは貴方のようない人物に違ひないでしよう」

何顕の邸、家の者に部屋まで通されると話し声がする、「袁氏の一方が来訪なされました」と家の者。

「少々待たせるように」と何顕。

「その必要はないわ、私は入つても構わないわよ。

この曹孟徳が、聞かれて困るような評価を受ける筈がないもの」「……お通しするように」

「ではどうぞ」と促されるままに部屋に入ると、どつかで最近見た顔、デジャヴュ。ああ、張邈だと思い、何か大事なことを忘れていることに気づく。

「ああ、2Pカラーでしたわね」

「?」

全く意味は通じない、北郷語はいまだ広まらず。

「こちらの話ですか」

「そう、なら自己しょ……」

「あなたが曹操さんですわね、噂で知つておりますわ。

ワタクシの豪奢で美しく、優雅なヘアース……髪型を真似ているのだとか。

いい心構えですわっ！ではもう一人が何顥さんですわね。

初めまして、汝南袁氏次期当主の袁紹本初ですわっ！」

「これは『丁寧に、何顥伯求と申します』

ですが本初殿、人の言、特に名乗りをを遮るは良くありません。

除するとしましよう、五点」

金髪ドリルつるペったんの曹操と黒髪ロングの官衣を纏う片めがね。正直最初は張バクの印象の方が強かつたが、だた直視するだけでにじみ出る霸気のようなもの。

「ああ、これが曹操か」と言いたくなるほどの空氣である。しかし、それに負けず劣らず独特の、清流のような雰囲気を何顥は発している。この後いくつかの「やれどこの役人は良い」、「あの店の定食は美味しい」等の日常会話を三人で繰り広げた。

そして袁紹、曹操二人そろつて何顥邸を出る。結局人物評価は本日告げられなかつたが、途中難しい話になると船をこいでいた袁紹の評価はいかほどであろうか、気になるところである。

「帰りましたか、曹操125点、袁紹132点。

曹操のゆく道は人死が多く出るでしょう、袁紹のゆく道は険しくも、いと気高き道でしょう。

の方は二律背反するようで芯根はよく似ておりますね」

普通、何顥の評価は本人に直接告げられることなく、他人、推薦者

越しに告げられることとなる。今回は両者共推薦したのは張邈であつた、その後張邈と何顥は二人の人となりをよく見、考え、話し合つたのだ。

「麗羽殿は優しいですねっ！」

「友として導けば漢の世は良くなるのかもしれない、二人ともそう思える方たちでした。

ですが、曹操は孤王である、袁紹は狐王である」

そして袁紹であるが、公孫賛、曹操と出会い、この時になつてようやく悟つた、「ああ、やつぱり恋姫なのね」ということを……

ちなみに話に出てきてないけどハムの人もちゃんと袁紹さんとあつたんだよ？

話はようやく戻るが、どうにかこうにか逃げ切れた彼女は曹操を睨む。懃々人を待たせた挙句、結局首謀者である彼女が袁紹を見捨てたのだ。ちなみにこの日から袁紹は曹操によるトラップ祭りに強制的に参加させられることとなる。

正直好きで罵に掛かるわけではないのだが、立場的に掛かつておかないと、後後左慈とか于吉とか現れて暗殺されるかもしれない、と彼女は思い違いをしていたりする。普通に賢い袁紹でも正史から外れるわけではないので、逆に彼女の有利な方向へ官渡の戦いまでは引っ張ってくれるだろう。

逆に言えば官渡の戦い以降は確実にやばいわけだが。それでも正史では袁紹は官渡以降でも巨大勢力であり続けたし、彼女が死んだあとに北の袁家はあと目争いで衰退するのだ。

……あれ？ これって官渡の戦い終わつた後つて、結局暗殺されんじゃね？

「孟徳さん、あなたどんだけ女好きなんですか？」

「そうね、可愛い子のためなら天下をとつてもいいと思えるぐらいだわ」

「天に耳あり、地に口あり誰に聽かれても良いこととは思えない。

滅多なことを言うべきではありませんわ、

少なくとも城門の前に孟徳さんの首がぽんつて置いてある場所なんて見たくないですわよ」

まさしく懲りない、しかも都の中で曹操のこの発言である。後の世の日本、京の都の平家のかむろではないが、今の腐った漢王朝では簡単に家取り潰しなどもありえる。密告を受けた役人からしてみれば、取り潰すそれだけで結構な甘い汁を吸えるのだ、この時代の合法的に。ちなみに曹操のこの言、この時代では子供にもわかるぐらいに危険だ、それ故に別段馬鹿の発言としてもおかしくはない。

「ふふ、心配してくれるの？ そうね麗羽、あなた私と共に来ない？ いい夢を見せてあげるわよ」

「遠慮しておきますわ、ワタクシ今は烏丸を抑えるのに精一杯ですの」

「ちなみに天に口あり、地に耳ありよ」

「も、もちろんわかっていますともっ！ 孟徳さんを試したのですわっ！」

「ふふふ、そうね」

実際彼女もあまり曹操のことが好きではなかつたが、なんせ結構弄ばれているし？ 流石に治安も良くない世の中なので人死にも結構見たことがあるのだが、それでも親しいとも言える悪友の青白い首が無造作に転がされるのは見たくない。ちなみにさつきのミスは演技ではなかつたりする。

そしてこの一年後に彼女は侍御史・虎賊中郎将に任じられ、

その翌年には曹孟徳と共に西園八校・中軍校尉に任じられる。

時は後漢、更には三国時代と呼ばれ黄巾等さまざまな大乱が巻き起こる時代であった。

ランを知る

そして何顛と出会つてから少し時を進ませる。

昨今の国の乱れは著しいものであつたが、さらなる混乱が漢の時代を襲う。後の世に言う、黄巾の乱であり、黄巾賊という呼称は三国志演義での呼び名である。

「みんなー！今日はてんほー」

「ちーほう」

「れんほうの」

黄色の巾？を頭部に装着した集団が南皮付近で大量に目撃された、その噂を聞き袁紹は幾人かの配下を連れ様子を見に来ていた。今はまだ冀州牧である韓馥の治める地であるが、既に袁氏についた田豊の策によりある程度は民の掌握に成功している。

「「土天舞台に集まってくれて！」」

「「本当にありがとっ！」」

「愛してるぜえー！」

「てんほーちゃんのためなら死ねるう！」

「いつもくくるなれんほうちやーんつ！」

集まつた人間が彼女たちに思い思に言葉を放つが、何故か内容は聞き取れる。なんと不気味なことか、他者の発言を邪魔しないように譲り合いながら叫んでいるみたい。

「「ほああああああーーー！ほああああーーー！」」

「……何ですか、あの集まりは？」

そしてそれを畠然として見つめる袁紹、黄巾が元々はただのフォンクラブ？だつたと記憶のなかで知つていた為、今はまだ黄巾党として各地を荒らし回る前に見学に来たのだ。

正直啞然、アイドル系に興味もなく生きるための不自由のなかつた前世、どちらかと言えば乱世の世の一歩手前までできている世界であつても、非常に裕福に育つた彼女は蝶よ花よと育てられてきた今世、歌に救いを求める彼らの声を理解するには少し足りない。自分が行なってきたモノの正しさも分からず、未だ迷い続ける彼女。何をすればいいのか、何をしてはいけないのか、目標すら立てること叶わず。それを少しばかり変えたきつかけは？ F B O……何顥のとある発言からである。

「なきぬ悪と、なす偽善。どちらが正しいかは誰にもわかりませぬ。なせねば民草は死に耐え（誤字にあらず）、なせば諸氏には指指されましようぞ。本初殿、張孟卓ほどの慈愛シヨウチをもてとは申しませぬ。ですがこの何伯求、いえ、真名を……真名で想智シヨウチとお呼びくだされ。わたくしめの願いは貴公が仁君へと成長することでござります。世を治めるは曹孟徳殿かもしぬませぬ、なれどその過程での被害は計り知れぬものでしよう。あの者が剣を掲げ振り下ろすだけで、民草は望んで死へと向かいます。何故、あなたが周知を偽るか問い合わせぬが、民への三考を得られよ、一つ公、一つ幸、一つ功。自ずと行く末は決まりましようぞ」

いつもの如く、近頃の課となつた何顥邸訪問。そして袁紹が彼女とこれまたいつもの如く他愛ない会話をしようと向かい合つてのこの言であるが。彼女は、いつもの崩した座りではなく、両膝を付け待ち構えていた、とりあえず正座であるな。

「……何を言つているのか、解らないといつても無駄なのでしょうね。想智殿の言い回しはぐどく分かりづらいですが、心に留めておきましよう。今後私のことは麗羽とお呼びください」

少々呆気にとられた、なにせ自分でも満足行くほど上手い具合にアル袁紹っぽい発言や行動が出来ていると思つていたのだ。そして今まで誰にも、あれ以来洛陽で度々会うようになつた曹孟徳にすらバレていないのだ。

呉しかり、許しかり、張しかり、知に優れるモノをもつてしまつたり着けていない。彼女たちは袁紹と奔走の友となるに至つたが、そ

れは彼女の成した事に対して、彼女自身の評価は一番袁紹へ好印象を抱いてある張バクにおいてもそこまで高くない。確かにやつていることは素晴らしいと感じてはいるが、袁紹自身の気まぐれ的ものだと知り落胆したのだ。

「麗羽殿、それがあなたの素ですか。ご安心を、私しか知らぬはなしであり、此度の話はは慈協との間でも解することはありますぬ」

「ひとつ聞かせて欲しいのですが、どこでお気づきに？」

「貴方の成すこと全てに筋があります。

貴方の生すこと全てに人があります。

貴方の為すこと全てに笑者があります。

それに気づけばそこでわかります。

名を惜しむものは貴方の本懐には気づきませぬ」

「……そうですか、私にはあまり意味がわかりませんが。しかし、勝者ですか？」

「いえ、恐らく貴方の言っているものは違うという前提で言いますが、笑う者でしょうしやです。慈協は貴方の心根は良いものと知つておりますが、あなたの自己愛発言に氣落ちしておりました。されど、慈協は知るべきです、彼女がやつていることもまた結局は自己愛の結果に過ぎないことを。貴方はうつけの振りのまま仁君となるがよいでしょう、であれば漢の世はまだ続けることができる。十常侍……、中常侍しかり濁流に潜む宦官に清流は勝てませぬ。まずは王佐の才を手に入れられよ、南皮を拠点に北方の雄となり、力を蓄えなされ

これで彼女にもやることができた。ここからは何時もの袁紹、わがままを言う様に遠まわし?に付き合いのある役人へと根回し?をする。

「張再さん、わたくし暑い領地はいりませんの、できれば……そうですね、冀州などがいいかと思いますわ」

「本初殿、それは冀州牧にとのお言葉ですかな？」

「ワタクシ、そんなことは言つておりませんわ。ただ、冀州、特に南

皮なんかワタクシにお似合い、そうは想いませんこと？」

これぐらいなら周囲の人間も「何時ものわがまま」か、どうせすぐ
に忘れるだろうとすれば良かつた。しかし、袁紹自ら冀州へ向かうお
決まりな言い訳として、遠縁の親族に会いに行くと称し、馬に乗つて
向かうほどである。更に事あるごとに冀州、冀州と呴くものだから流
石に何かしらの対策を建てねばと、周りは奔走することとなつた。

「何をのろのろとしているのですかつ劉慶さん！早く行きますわよ
！」

「はあ～、……分かつております」

以前のお付は交代、また新しいお付へと変更されていた。最近は暇
さえあれば馬車と私兵を用立て、冀州の豪族、有力者の邸を訪問し彼
らの懷に金銭を落とした。そんな中である。

「お待ちをつ！」

一人の将兵が駆け込んでくる。袁家とも元々仲が良く、洛陽の守備
を任せられている一人である。今は珍しくそこと真面目で義理堅い、
男であつた。

「なんですか、徐双さん？ワタクシ今から、」

「それどころではありませぬ！黄巾を身につけた賊徒の手によつて
中常侍の封？、徐奉が内応！幸い、蜂起計画は内輪揉めで潰えたよう
ですが、1000人余りが処刑されるようです！本初殿も虎賊中郎将
としての役目が下されることになりますぞ」

「なるほど、最近都が騒がしく華麗でなかつたのはそういうことでし
たのね？ええ、気づいてましたとも、この袁本初に知らないことなど
なくつてよつ！おーほつほつほつほつ！」

（……ホントかよ）

態どらしい、でも逆にそれが今では効果的である。

「えんしょおーほんしょおー、貴い様あの役目えーはー洛陽近辺の守

護であらう。励むようーにい」

十（中）常侍の一人、12人　張讓、趙忠、夏惲、郭勝、孫璋、畢嵐、栗嵩、段珪、高望、張恭、韓団、宋典。その中の一人、夏惲がこの言葉である。

一応勅命としての命令だが、ここに靈帝の意思は一切入っていない。袁紹と関わりのある低位宦官の計らい、というよりもイランお世話で一番守備を厚く、つまり兵を置くことのできる洛陽の守護を任せられたのだ。その他にも討伐に行つても大して役に立たないだろうとの判断で十常侍も納得している。正直黄巾がその大兵力で襲来し、もし万が一洛陽を落とされたりしたら確実に靈帝と宦官連中は残さず殺される、そして搾取するため人間を奪う目の上のタンコブであるからして早々の討伐を望んでいるのだ。金づるが死ぬのもアレだし、大きな力を持たせてアホに好き勝手させるのも馬鹿らしいというわけである。

「想智さん、お願ひがござりますわ。私が金を出すので商人経由でとある方々を援助して欲しいのですわ」

「はて、どういった経緯でそのようなことを？麗羽殿の周囲に曹操殿以外にそのような援助をする程の勇を持つ御仁は……面識の無い方ですか？」

「そうですね、琢郡にいるとだけ申しておきますわ。想智さんの信用置ける商家の方にお願いして、装備と馬を援助してくださいな。それと曹操さんには既に騎兵2000と歩兵3000を渡しておりますわ。使い潰しても、数を減らしてもいい、その代わり袁家にふさわしい華麗で精強な兵士にして返してくださいな、そう言つておきましたわ。まああとは、彼らが曹操さんから離れたくないと言わないよう望むだけですわ」

ちなみに曹操であるが袁紹と違い、黃巾討伐の役目をおい官軍5000、袁紹の私兵5000を持って陳留へ出向いていいる。宦官に嫌われて、様々なことをやらかしてきた曹操は確かに少數軍勢の場合もあるが、ほとんどが大きく固まって行動する黄巾を相手にするには、少々心もとない兵数しか与えられず、都を出発した。それに恩を売る

ことも含め、少々心配だった袁紹は彼女に兵糧と兵を自らの私財で融通したのだ。

「その件に関しては問題ない程度に曹操殿なら抑えてくれると思いまが、彼女の野心のことを考慮すればどう行動するか判断付きませんね。義に従うか、大義をなす前の小義と割り切るか 話を戻しますが、それだけでは誰を援助すればいいのかわからないのですが……」

「見れば分かります、とだけ言っておいてくださいな。私の考えている通りの人物なら直感に従えば簡単だと思いますわ。なんせ、ワタクシが援助を考えている方は生粋の人たらしですわよ？もしそれでも見つけられない、そうなるのであればワタクシの期待が間違つていた。その商人に全て差し上げてくださいな」

「態と見つけないということもありうるかもしませんが？」

いつもより目を細め何顛は袁紹を見る。何かを試すような、何かを考えそこに上がった疑問を除くための質問である。

「またまた、ご冗談を。想智さんのことも想智さんが選ぶ商人のことも間違いがあるとは思いませんわ。もしうなつたとしたなら、そうですわねえ、想智さんをワタクシの侍女にでもさせてもらいますわ」何顛にとつてはある意味正解、ある意味予想通りの回答が袁紹より得られる。ため息をつきながら「やはりか」と納得し頭を下ろすが、すぐには袁紹の方を向き直し、その目を見つめる。そして袁紹はいつも他の人間に見せる何かぼつけっとした雰囲気の顔や、態とらしいニコニコ顔ではない本当の笑顔で何顛を見ていた。

「信頼は嬉しく思います。ですが、気をつけてください。今は乱世、何が起こるかわかりませんし、もちろん私も人間、失敗もあります。あなたは本当の身内には気づかない内に甘やかされてしまいます。残念ながら甘やかす方も甘やかされる方も貴方があまりに自然に振舞うために気づきませんが。いつか、気づかないものがあなたに恩を返すことはなく、情も義理も感じることはありません。そのような意図はなくとも、貴方は貴方の首を自分で絞める事になるやもしれない。何もするなというわけではありませんが、一応心に留めておいてください」

本来より潤沢な装備を持つて参戦した劉備、本来より多勢をもつて参戦した曹操。彼女が知る外史の道筋より大きく離れたところにはまだない。官軍も順調に負けたり勝ったりを繰り返しながら黄巾の弱体に成功している。そのような中ひとつ占い、噂が世間に流れた。

「天の御使い？」

「はい、管路の予言です。なんでも流星にのつて乱世を鎮めるために漢土に降りるそうです」

「……そうですか」

「……意外です、”天”その言葉にもう少し反応があるかと思いました」

「何も思うことがない、と言えば嘘になりますわね。ですが、”やはり来たか”という気持ちの方が遙かに大きい。天の御使いは誰のもとへと行くのでしょうか？その程度の疑問しかないですわ」

「誰のもとへですか……、旗揚げすることも十分考えられるのでは？」

「それこそ、天のみぞ知ることでしよう？漢という国のみを救う天なのか」

「民含め漢土の全てを救う天なのか」

「まさしく見ものです」

「貴女は人ごとですわね」

2月も経たずに黄巾敗北の知らせが都へと届く。

『曹孟徳、黃巾本隊を降す』

その際、張角、張宝、張梁は首を討たれたらしい。なんでも三兄弟は一間三尺程の大男で腕が六本とか手に持つ竹簡を振るうだけで落石を起こすとか、非常識なことばかりが書かれた手配書と全く同じような人間だったらしい。正直馬鹿らしいが、兄弟それぞれ三枚の手配書の顔と同じ首が送られてきたのである。その確認のために、以前張角たちを見たことがあると漏らした袁紹は宦官共に呼ばれている。

「ええ、このような顔でしたわねえ。汚らしい顔が雁首揃えて吠え

ていましたもの、よく覚えていますわ」

珍しく、いつもの金ぴかな服装ではない、質素な官衣を纏い宮へと向かう。知る人が見ていればおそらく驚くであろう。

「ふむ、袁本初よ、なぜその時にこ奴らを討たなかつた。そこでこ奴らの首を落としていれば、これほどの被害は出なかつたのではないかっ！」

冕冠をじやらじやらと鳴らし立ち上がる男。そしてそれを囲む十常侍含める宦官連中。

「その通りでござりますわ、この袁本初言い訳のしようもございません。あまんじて罰を受ける所存でござります」

「陛下、お言葉ですが此度、袁本初殿はそれを補つて余りある功を立てております。洛陽の守護はもちろんのこと、此度の第一勲である曹孟徳へ兵の貸渡、そのほか風の噂では大勲を挙げた義勇軍にも援助をしていたとか。ご存知の通り兵法の基本は敵より多くの兵を集めることです。あの場で陛下のために袁本初殿があやつらに斬りかかるても多勢に無勢、討ち取られた拳句火に油を注ぐだけとなつておりましたでしよう」

「……良い、袁本初よ此度は見逃す。次はないと思うがよい」

その後すぐに漢土を揺るがす報が知らされる。

『靈帝崩御』

黄巾、治まつて半月後のことであつた。もとより長くはないとされていた靈帝、黄巾の乱が治まり気が緩んだせいであろう。袁紹に向け次はないとし吠えたが、先に舞台を降りたのは靈帝であつた。

さて、話は張角たちのことに移るが、もちろん彼女は曹操の送つてきた首か違うことがわかつていていたし、事前の知識で張角たちが曹操のもとへ身を寄せていることを知つていた。そして宦官の一人が袁紹にあの時あの場で行なつた質問はこうである。

「この者たちが黄巾で間違いないか？」

その宦官は張角たちが首謀者であるから、天を現すは皇帝と同じように彼らを現す黄巾という言葉で張角達のことを尋ねた。三つの首は確かに黄巾の者である、だが、張角たちではない。あの場にこの三つの首が居たのも本当であるし、汚らしい格好のものが多かったのも確かである。それ故に彼女は聞かれたことに嘘はついていないが、言わなければならない本当のことも言つていない。何人かは気づいていたかもしぬないが、黄巾の乱はこれにて一応の治まりを見せることとなる。

袁紹はある程度の未来を、英雄たちが女性に変わった世界のことをこの世界に来る前から知っている。そこまで思い入れがあるわけでもなく、ある程度の流れと人物を知つているという利点だけであつたが、それでも十分すぎるアドバンテージであつた。彼女は潤沢な袁家の資金と農業改革、職人の抱え込み攻城兵器の開発などを片手間に対処できる程度の黄巾賊を相手にしながらおのが領地（既に韓馥は手回しにより左遷されている）に半ば引きこもるように行なつていた。

ある日のことである、曹孟徳と共に黄巾の乱での功績として中級宦官たちの手回しで西園八校・中軍校尉に任じられた袁紹は何進に領地より呼ばれていた。

「久しいな袁本初、どうだ私のものにならんか？」

「お戯れを、それより洛陽に呼び出す程のことです、何か大事でもございますのですか？」

「……宦官を討つ、でなければ我が首が危ない。何か案は無いものか、そう考えヌシを呼んだ」

この発言、袁紹が無能と思つてゐる者には本来出せない質問である。ではなぜ、何進は袁紹にこの質問をしたのであろうか？ 答えは单纯、たんに袁紹のそのたわわな胸と黙つていれば美人な袁紹にベタ惚れであるからだ。袁紹としては鳥肌ものであつたが、お金お金と言

いながら寄つてこない人間は久しぶりであつたし、彼女に氣に入られようと何進は彼女へよく気配りをしてくれた。この何進將軍、確かに俗物であつたし、小太りの中年のおつさんでもあつた。洛陽という地はまさに魔窟であつた。己が望もうと望まないとも周囲の人間は、彼女の持つ資金迷声をあわよくば手に入れようと寄つてきたのだ。別にお金が惜しいわけでも地位が惜しいわけでもなかつたが、目が錢の輩に付き合つるのは非常に億劫であつた。そして人間不信になりかけた時に、それを対処してくれたのが何進であつたのだ。

「安心しろ、人払いは済んでおる。おヌシが嬌声をあげようとも何をつぶやこうとも漏れることはない」

「……まず洛陽の守護には董卓殿はどうでしようか？ 異民族との戦を続け精強であると聞いておりますわ」

「そうか、では早速その様にしよう！」

誰かが聞いていれば確実に早つ！ と思うほどの即断即決である。しかも、あからさま過ぎる話題のすり替えすらも成功している気がある。

「各地に散らばる諸侯にも呼びかけるべきでしそうが、あまり多くは。丁原殿辺りが一騎当千の勇将を抱えているとのお話を聞いておりますわ」

「では、董卓と丁原だけでかまわぬのか？」

「あまりに派手に諸侯を動かせば変に思われますわ。幸いその二名だけであれば言い訳が聞きますわ。今陳留にいる曹操さんや、ワタクシが抜けた穴を埋めるとでも言つておけばよろしいかと」

ここまでペラペラ案を出していれば袁紹アホの子じやないとバレてしまうかもれない。でも実際にはそんなことはなかつた。將軍としては中途半端に無能、人心には機敏、思い切りがかけ常に人に對し疑心暗鬼であるという、それが何進の評価であるが、袁紹の言葉にだけは何故かハイハイと従うほどにベタ惚れであるらしい。もちろん中身元男であつた袁紹は生理的に受け付けないとこもあつたが、性的なことを除けば袁紹にとつて何進は話の分かるおつちやん、それだけ

だ。

その後、何進の呼びかけに応じ丁原が2000騎の騎馬を従えてやつてくる。だがしかし、丁原が都に呼ばれてすぐ、何進と丁原は十常侍の手によつて宮中で暗殺される。すぐさま董卓軍がと丁原軍の後続であつた呂布軍1000騎が到着して治安維持に努めていなければ洛陽は再び荒れていたかもしない。そして何進たちが暗殺されたのは、ちょうど袁紹が一区切り付け、南皮へと戻つている時であつた。袁紹はすぐさま500の兵をつれ南皮を発ち、都へと向かう。もとより彼女は何進に宦官からの呼び出しに安易に応じないよう言ひ含めていたのだが、共には丁原もいるからと安心して宮へと向かつてしまつた何進。結局もろとも討たれてしまい、彼が殺されたと聞き彼女はまず驚いた、そして知つていながらと自分にも宦官にも憤怒した。呂布も当初激怒していたのだが、董卓の説得で丁原のあとを継ぎ洛陽に駐屯することとなつたのだ。ちなみに曹操に貸与していた兵はすり減つた分も補充、更には1000名程追加されて袁紹へと返還されている。先の件、曹操はこのままで行くと借りを作つたままになり、後に大変なことになると考へ、少々財政は厳しかつたが全てを袁紹へと返したのだ。

その場は自らの権に物を言わせ、宮に兵を進める。

彼女が高々と掲げ振り下ろした剣に従い、兵が門に取り付く。まづ、近衛の兵を問答無用で切り捨て中へと押し入る。途中出会う者は全てがなで斬りとなつた。もちろん宦官の中にそこそ親しくしていた者もいたのだが、その者たちは袁紹が洛陽に到着してすぐに自らの屋敷に引きこもつてゐる。

「袁本初よ、ここを何処と心得る！宮中であるぞ！
剣を引け！そして今その己が首を自らの剣で搔ききれば一族は見逃そうぞ！」

一人の宦官が叫ぶ。そちらに目を向ける袁紹、一旦血に濡れた剣を降ろし、男を見つめる。他の兵はすぐさま宮の中に二人一組となり散開し宦官の殲滅をはじめる。近衛もそこそこの精銳を揃え袁紹配下の兵を迎え撃つが、いかんせ今この地に連れてきている兵は田豊の手によつて育てられ、冀州で黃巾と戦い続けてきた兵の中でも更に腕が確かなものたちである。ましてや実戦を行う事がない、宮中剣技の近衛兵では少々話にならなかつた、精々いよいよりマシ程度なのだ。剣を下ろした袁紹が宦官側の話を聞く気があると見るやすぐに叫ぶ。「なぜ、何進ごときに、なぜそう忠を誓うのだ！」

「確かに彼は俗物で、ワタクシを目で犯すような下卑た男でございましたわ、ですが彼に救われたのも事実。この袁本初、受けた恩は返すと決めておりますの。

お世辞といえども、我が救われたのは事実！
だた人より財を喰らう獸である貴公等には理解できまい！
少しの恩も返せずうちに恩人を失う空虚さを！
かまわん、我が全て責を背負う、殺すのだ！
宮に巢食う悪鬼どもを討ち取れ討ち取るのだ、この袁本初がさらなる大乱の引き金となろうとも！」

目の前にいた宦官を切り捨てる。それが片付くとすぐさま奥へと押し入り、彼ら兵士の目に映つた宦官全てを善惡問わずに切り捨てさせる。だがそれも終わりに近づく。

「都を騒がす逆賊よ！すぐに剣を置くがいい！さもなくばこの董仲

穎が配下、華雄が討ち取つてやろう！」
董卓配下の兵を引き連れた華雄が、宮へと到着したことがきっかけである。すぐさま未だ兵が回つていない場所、もしくは少ない場所を突破し袁紹は逃げ出す。

「厄介なのが来ましたわね、目的は果たせませんでしたが、ここは引いておきましょう」

「はっ！上東門より駆け抜ける。よいな！誰一人捕まるなよ！」

彼女はそのまま連れていた手勢を引き連れ洛陽を出る、田豊の手によつて手に入れることができた冀州の本拠に飛び込んだのだ。

閑話 ヒトを知る

いつの頃であつただろうか？

幼い頃、母に連れられ名門である袁家を訪れたのは。

『えんしょうさま、吉利ともうします』

『そうですか、では吉利ワタクシと遊びましょう？』

そうあの時なのだろう、当時はまだ生きていた袁隗様に彼女を紹介された。

一つか二つ上らしいが、非常に聰明であると聞いた。

袁隗様が彼女に話しかけるまで、彼女は庭園の池の隅にある岩に腰掛けボーツと鯉を眺めていたことを覚えている。

何を考えているのだろう？そう思つた。

『えんしょうさまは何をしているのですか？』

『堅苦しいですわね、麗羽でいいですわ。』

彼女は初対面の私にすぐさま真名を教えた、その時の私はまだ常識を習っている最中でその重みなど対して知らなかつた。

そのためなんの考えもなしにそのことを受け入れたものである。いつになつたら遊ぶのだろう？

『れいはさま？何を見ているのですか？』

『何も、何も見ていませんわ。見えているものはありますが、見てはい
ない』

何を言つて いるのだろうか？全くわからなかつた。

だけど、何か池を眺め、時折空を眺める彼女が非常に綺麗に思えた。

最初は遊ぶように言われていたはずだが、気がついたら一緒になつて池を眺め、空を眺めた。

『吉利、あなたは何を見ているのですか?』

『水と空です』

突如彼女が声をかけてきた、意趣返しなのだろうか?
その時は何も考えずに答えていた。

『そうですか、水は、空は何色ですか?』

『水はどうめいです。空は水色です』

『そうですか』

一言だけであつた、結局は何が聞きたかったのかもわからない。

『水は透明、空は水色、ならば空も透明なのでしょうね』

水色は水色、透明は透明ではないか?何を言つているのだろう?何度目かわからぬがそう思つた。

でも今になつて思えば非常に笑えてくる話だ。
よくわからない話をした。

結局お母様と袁隗様が呼びに来るまで彼女とずっと池と空を眺めたのだった。

私にとつて、忘れられない出来事。

彼女のどこに惹かれたのか、わからぬ。

でも気がついたら、それまではお母様と同じように真っ直ぐに下ろしていた髪を彼女と同じように巻いたのだった。

「華琳、実際のところの袁紹さんってどんな人なんだ?」

白銀に輝く服を着た、中性的な顔を持つ男性。

背丈はそこそこ高く、体も結構がつしりとしている。

そして彼の前にはドリルツインテールのまない……、可憐な美少

女。

男性は北郷一刀、天の御使いと呼ばれる青年である。

少女は以前袁紹と花嫁泥棒をやろうとして結局失敗した曹操である。

「そうね、わからないわ」

「ん、わからない？ どういうことだ、幼馴染で仲はよかつたんだろ？」

彼女たちが今いるのは曹操の執務室、昨日袁紹からの檄文を受け取り朝議にて参加の旨を発表したここである。

ちなみに使者は荀文若であつた。

この後彼女は曹操に熱烈な歓迎と勧誘を受けることとなるのは余談である。

「そ、う、は、言、わ、れ、て、も、ね、一、刀。普、段、は、馬、鹿、み、た、い、な、高、笑、い、を、し、て、い、た、り、私、と、か、春、蘭、の、仕、掛、け、た、罠、に、簡、單、に、ハ、マ、る、よ、う、な、ア、ホ、…、に、見、え、る、の、よ、」

心底意味がわからない、といった感じにため息をつきながら北郷の方を見る。

実は彼女が執務室で筆を持つて竹簡に向かっていなることは珍しい。

「は、あ、…、？、華、琳、が、ア、ホ、と、思、つ、た、の、な、ら、や、つ、ぱ、り、頭、は、ゆ、る、い、ん、じ、や、？、」

「でもね、一刀、あの子罠に引っかかる前に少しだけ目を細めるの」「それがどうしたんだよ」

「はあ、いい？ 一刀。彼女は罠の前で目を細めて、そのまま罠の前まで進み引っ掛かるの。

どう考へても気づいているんじゃないか、と疑うのが当然でしょ」「わざわざ自分から引っ掛かるのっておかしくないか？」

今の時代は名声こそが大事、今の袁紹さんみたいな外聞やあだ名は、名士を勧誘する際にも非常に困るんじゃないのか？」

「そうね、不利が多くて利がない。

彼女が私たちを油断させようとしているなんて事も考えられるのだけど、ここまで逆の意味での名声は命取りだわ」

「じゃあやつぱりアホって評価に間違いはないんじゃないの？」

「……そうね」

本当にそりだつたらどれだけ楽な事だろうか？

本来なら彼のことを呆れた目で見るのであろう、でも彼女には北郷のことを馬鹿にできない理由があつた。

以前の彼女、二度目に彼女にあつた時には私のこと忘れていたけれど、あの出会いを忘れられない私はどこかで彼女の噂を信じきれないでいた。

だが、噂通りの人物ゆえに私に出会つたことすらも忘れていたのではないか？ そう考えたこともあった。

最初の出会いを今でも夢に見ることがある私には、あの時のように彼女が何を考えて何がやりたいのか、全くわからなかつた。

でも、霸王を目指すかの彼女はそこで思考を止まることは出来ない。

「彼女が生き残っている限り、いずれか道は交わるわ、そのとき判断すればいい」

サクを知る

幾時ばかりかが過ぎた。

このとき袁紹は洛陽に残してきた耳より、汝南より何顥が洛陽に入つたことを聞いた。この世界で党錮の禁があったのは、ちょうど袁紹が喪に服していた頃、曹操と袁紹が何かしらの問題（先の花嫁強奪事件など）を起こしていた以前の時期（つまり曹操と出会う前）でもあり、その時何顥は洛陽より離れ官を正すための行動をしていたとのことだ。

すぐさま戻らなかつたのは、おそらく彼女の知り合い、清流派であつたか、党錮の禁自体は黄巾の乱が大きくなつた際にすぐさま解除されたが、洛陽にすぐさま戻らず今の今まで静かだつたのは、彼女が準備をしていたからであり、以前の繋がりをもつてして今の漢の政治を幾分ばかりか正そうとしているのではないだろうか？

党錮の禁の際に誅されたらしい司隸校尉・李膺や太傅陳蕃とも仲が良く、身分差ありながらの友誼もあつたとの話を洛陽に来る以前の噂でも聞いたことがある。なんせ何顥、人のことはバカス力言うくせに自分のことは棚に上げる性格で、非常に義に厚いことでも有名である。彼女何顥がまだ一諸生であったころ、虞偉高（ぐいこう）という友人がいたそうだ、その者が病に伏せた際に少しつぶやいただけである「父の仇を討てない事が無念だ」との言葉によりその仇であり当財を持つことで名が知れた者を討ち、虞偉高の墓前に首級を添えらしい。

あの顔でその過激さである。

さらには郭泰（かくたい）、賈彪（かひょう）等の親しき友人も党錮の禁よりそのあと少しで連座する形に亡くしている。宦官共にかける恨みもを一入のものであろうので、成功したのならば確實に皆殺しにするだろう。

しかし、奴らも馬鹿ではない、袁紹も一応の忠告をしたが熱くなつた彼女を知らないのでどうなるかもわからない。本来の正史であれば彼女は董卓に殺されることになるのだろうが、袁紹は恋姫世界の董卓が傍若無人でないことを知つていて。……が、それを補つて余りあるほど宦官共が腐っていることも知つていて。もし彼女が死ぬのならば企てが失敗し返り討ちにあつた時であろう。

「袁本初、先の騷乱の罪に問わぬ。

が、各地に檄を飛ばし董卓を討て、これは勅命である」

「謹んでお受けいたしまする」

豚のように肥え太つた（このとき袁紹は歩くのも大変だろうなと思つた）、文官に読み上げられる勅。正しく玉璽の印が押されたこれは確かに勅命となるのだろう。だが実際は袁紹がいなくなつた洛陽で宦官たちに請われ相国についたはずの董卓は、都で善政を敷くあまりに宦官にとつては目の上のたんこぶとも呼べる存在になつていった。喉元過ぎれば熱さを忘れる。彼ら宦官にとつては恩義も自分たちに有益かどうかですぐさま捨ててしまえるものなのであろう。……そこまで考え違うことに気づく。

「なるほど、想智さん考えましたわね」

そう、何顯は上手いこと宦官を謀つたのだろう、董卓を討つように唆した。おそらく、おそらくであろうが、宦官自身を使って宦官を排除させようということか。

ワタクシが董卓さんよりも宦官を討つことを優先させると知つてゐるか……使えるならば友でも使う、ましてや利害も一致してゐる。洛陽に入場する際にどさくさに紛れて焼き討ちにし彼女らは長安に移るのだろう。おそらくは全てを董卓に押し付けて……。清流では濁流に飲み込まれるのなら、それを飲み込む海を用意すればいいといふことであろうか？

「貸しがひとつですわよ、想智さん」

ならば道化を演じましょう。

“おーほつほつほ　ちよつと董卓さんが洛陽で悪政を敷いている
そうですので、
みなさんで懲らしめますわよ、だから河内に集まりなさいな”

檄文を発するのにでもこれである、本当に馬鹿みたいに思えるかもしれない。彼女は一部の人間の前を除いてある意味猫をかぶつているのだ。ほんどの場合彼が知る原作の袁紹のように高笑いばかりしてアフオのフリだ。ついたあだ名は名門（笑）、袁家の二大看板、うつけ。彼女が俗人に理解できない開発や改革を領地で行い、それが財を食いつぶすように見えたこともそれに拍車をかけた。他の雄たちは彼女が野心のため、董卓に嫉妬したために兵を起こしたと思うことであろう。ならばかぶる汚名はさらに増えるが、どうせやらねば公式チートに殺される、いまさらである。

「……安穩が欲しい」

「姫く、持つていくのはこれだけく」

「そうですわね。元皓さん、文若さん兵糧はこれだけですの？」

人の気も知らないでとも思わないでもないが、正史、もしくは演義世界を望むであろう左慈達に対抗するには武は必須である。催眠であつたか、そのようなものも使えたはずだがそれの対処はどうしようもあるまい。ならば恋姫でも演義でもどちらにでも居た顔良、文醜は必須。うまくいけば恋姫のように漢土を旅するルートになるかもしない。そうなれば三国が興ったあとに蜀にでも行つてのんびりす

ればいい。

「はつ！ 我軍の糧はこれだけであります！ これとは別に諸侯にせびられるであろうものは別に確保しているであります！」

自分の頭の大きさよりもさらに長い冠をかぶる幼女、彼女の名前は田豊元皓、真名は老老。白髪、合法口りな元不遇の武将である。我らが麗羽様はもちろん死ぬのは嫌なので身内の話はよく聞くようになっている。田豊さんは裏切るようなお人でないが、荀彧さんはすぐに出奔しそうなので、常日頃気を使っているのだ。

「せびるつてあんたねえ……」

はあ～本初様、本当に攻城兵器を持つていかなくてよろしいのでしょうか？

おそらく、いえ確実に虎牢関を攻略するならばあれらは必要になるでしょう

我らがツンデレ猫耳軍師の荀彧さん、登用されてから今まで、袁家にてその敏腕を思う存分揮っている。本来の恋姫なら既に曹操の下に去っているのだが、今のところはこの地に落ち着いているようだ。この二名のおかげで本来の恋姫袁紹の数倍の資金と国力を得ている。兵に関してもそこそこ精強、袁紹直属の親衛隊や顏良文醜の兵に至つては虎豹騎並みの精銳ぞろいとの評判である。

「何を言っていますの？ そんな面倒なことは他の方々にお任せすればいいのですわ。

……ん～ですが、文若さんの言いたいこともわからないでもないですかねえ。

少しぐらいは持つて行つても構いませんことよ？」

「では一軍団ほど用意させます」

バカのフリのためあまり派手なことは出来ない、だがやりすぎると苟或はささつと出奔してしまう。結構、非常に胃の痛い話である。

「文ちゃん！どこにいって！こんな所にいた！面倒臭いからつて細かいこと私に押し付けないでよ！」

「げつ！顔良つ！ひめつひめつ！助けてつ、斗詩に殺される！」

「文ちゃん！人聞きの悪いこと言わないでよ！」

「あんな文字の羅列をあたいにみせたら死んでしまう！」

「またはじまつた」

ため息をつく、軍師達とそれを少々冷めた目で見る一人の女性。そこには多分の諦めも混じっていた。

その後、荀諶、許攸等に留守を任せることにして彼女本人の出立の準備を開始する。許攸は袁紹が洛陽にて一暴れしてすぐに彼女の下にやつて来た。どうせ許攸のことである、金蔓が居なくなつたのが嫌か、董卓の下での金策が難しかつたかしたのであろう。本人も「金さえあれば裏切らないアルね」といつそ清々しいまでに豪語している。まあ、それ相応の働きをするから別によいのであるが。結局八万ほどの兵を、本来ならばさらに三倍を優に越す兵を動員できるわけだが、正直金もかかるし他の諸侯に睨まれるのも面倒なので殆ど置いていく。将兵に関しても結構な数がいるが、連れて行くのは田豊、荀或、文醜、顔良で、それ以外の将は全て無名の者ばかりである。他の袁家の有名どころは基本守備を任せ置いていく。

?

「うすい鳥離や、もう少しゆっくり歩きなさいな。

他の者を置いてゆけば、ワタクシが狙われますのよ」

黒馬踵が白き、名馬あり。

その黒きの濃きは、本来彼女がいつも話す優雅とは程遠い色である。それこそ彼女が本当に優雅を目指すならば白馬なのだろう、だが彼女はそうはしなかつた。彼女周りを囲む親衛隊の馬も全て黒馬、彼女の乗る馬はそれより一回り二回り大きいがやはり黒馬である。その上に金の細工がされた鞍を装備し、馬の胴体を足で挟んで騎乗している。

「姫様、此度は鎧を用意せんとよろしゅうございましたか？」

30代半ば程、口髭と顎鬚を見事にの伸ばした一人の男が袁紹の話しかける。男の名を呂誕という、図州東平郡の生まれで後の袁家の主将呂翔、呂曠の父である。先代より袁家に仕え、袁紹が袁家を継いだ際に汝南よりこちらに移ってきた（生家があちらのため子ら二人は図州東平郡にいるらしい）。数少ない、袁紹自身を知る人間である。他には、何顥、田豊（少々前にバレたが袁紹は気づいていない）、郭援、郭榮、劉単等である。ちなみに前者二人以外は親衛隊の隊長格であり、袁家に仕えて長いものばかりである。

「構いませんわよ、別に乗れないわけでもありませんでした。今はあまり派手なことはしない方がいいですわ。まあ、ワタクシが広めなくとも同じものを天の御使い様が広めますわよ」

「天の御使いですか、恐れ多い者ですな。占家管路は何を思つたか、私は奴が氣でも狂うたのではないかと、そう思いましたな」

「既に龍も息断える寸前、民にとつての天は龍にはないのでしょう」

「誰が聞いておるかわからぬのです。あまり派手なことは申さぬほうがよろしいかと」

「……そうですわね。ああ、もうそろそろ御輿を用意してくださいな。鳥鶏は後ろに回しておいてください、演技も面倒くさいものですねえ」

ならば止めればいいだけの話であるが、それをしないのは何かしらのこだわりが既に彼女の中にあるのだろう。少しばかりしてやつて来た御輿、地に下ろされたそれに乗ると備え付けられた座に足を組んで座る。前六人、後ろ六人の計12二人によつて抱えられたそれは実は馬車よりも乗り心地が良い。

かと言つて移動が遅すぎるので普段は全く使えないものであるが、彼にとつては恋姫の袁紹の乗り物＝御輿で繋がれてしまつてゐる。個人的にはこれつて格好の的だよなと思い、狙つてくださいつて言つてるようなものだと、ある意味原作の袁紹の大物さに感心していた。そこまでするなら乗らなければいいのに。

ここで親衛隊の話をしよう。

他の袁紹軍の兵は鱗一枚が厚さ一ミリもない粗鉄の魚鱗甲に真鍮メッキである、いわゆる太陽にすら反射する金ぴかで、晴れの日は目が痛いことこの上ない。だが、親衛隊に関しては三ミリほどの鍛造甲冑に漆を塗り、さらに甲冑に穴を開け糸に針金を巻き込んだもので更に魚鱗を繋いでいるのである。

更には魚鱗にはセメントに黒を混ぜ込んだモノを薄く塗りつけている。全員が甲冑面を付け黒ずくめ、装備品、剣、槍、諸葛弩の三点セットをそれぞれ与えられ、それらまでも全てが黒く塗られ、もちろん相当な金がかかっている（剣の刀身は別）。

※諸葛弩は10連装式の弩、三国志時代一般の設置型の複数発射のものや複数装填複数発射のモノではない。ちなみに連弩と諸葛亮の関係は有名であるが、諸葛弩と諸葛亮は関係なく、両方とも連弩扱いである。

馬も黒に統一、普通の中国馬よりも優秀な夷狄の馬を莫大な食料と引き換えて手に入れている。ついでに蹄鉄も装備済みである（蹄鉄工の育成、未だ研究中）。親衛隊1000騎で普通の騎兵の5倍近くの金がかかっているのだ。

そこまで金がかかっているのならば、さぞ強いのだろう。もちろん

強い、元々曹操に貸し出した兵や黄巾の軍に少數突貫させた兵の生き残りで構成されており、一振りで人間を弾き飛ばす公式チート共には流石に敵わんが、それでも時間稼ぎと盾にはなる。（余談だが曹操は兵の返還の際、新兵と入れ替えて返還するかどうか迷つた。）甲冑の性能で言えば、流石に強弩は無理だが、普通の弓矢ならばほとんど通さない。蹄鉄の打ち直しやらなんやらで維持費も馬鹿にならないが、虎の子であり実戦訓練以外では殆ど使われていない。今回もついでに長距離行軍の訓練ついでに同行はさせている、がおそらく出番はないだろう。

御輿に移つてからは袁紹は軍の前方に移る。代わりに親衛隊は後陣に移り袁紹直下の兵と悟られない様にする。もちろん口止めはほとんどの安心してよい。なんせ親衛隊員の全てが警邏（ある意味監視）付の一等地に住居を構えているのだ。

「目的の集合場所まで、あとどれほど時間がかかりますの？」

金ピカ装備の前を行く袁紹軍では普通の騎兵に尋ねる、もちろん先ほどまでの会話の呂誕ではない。前方というが流石に先頭ではない、彼女の前には騎兵が三百騎が索敵合戦せて展開している。

「一日ほどでしょう、今日はそろそろ夕刻、日が暮れ始めますのでもう少し開けた場所に出たら野営します」

宣言通り、その後一刻ほどで開けた場所に出、簡易設営をはじめる。丸太でできた、差込式の簡易馬坊柵やら二メートルほどの見張り台などである。見張り台等を組み立ても実際は殆ど今のところ役には立たない、なんせ奴さんは洛陽付近の閑に閉じこもり出てこないはずだからである。これが集結する前に各個撃破等でも試みれば、地形的周囲の地理においても待つのは挾撃であり、そうなつた場合敗北が確定するのでまずない。と言つても、今の段階で袁紹軍が壊滅すれば連合

結成すらもおぼつかないだろう。流石に賭けの要素が強すぎるので、董卓軍の軍師であり、できる限り確実な結果を求めるであろう賈団等は絶対に繰り出さないことが分かっている。これがもし曹操ならば一か八かに賭けて出撃したかもしれないが……

そして二日、同じように行軍し続け、宣言通りに目的の場所へと到着した。まだほとんどの諸侯が到着しておらず、孫旗と鮑旗、陶旗が翻るばかりである。袁紹はそのまま設営を命じると、親衛隊の数騎のみを従え虎牢関へと向かう。

「……関というよりは城塞ですわね」

「ふむ、姫様は見たことがありますんでしたかな？」

「洛陽を出た時は、見つかりにくい獸道に毛が生えた程度のものを選びましたわ。あの時はそこまでの数がいたわけではございませんもの。まあ、おそらく塞がれているでしょうし、兵も置かれているでしょう。何よりその道を通れば時間がかかりすぎますわ」

「ですが、相手は天下に名高い虎牢関、順当に攻めれば被害が大きくなりませぬか」

「諸侯は名を得るためにこの地に集まつておるのでわよ。関を落とす役目を誰かに押し付けるならまだしも、董卓の将が守る城を回り道をしたら臆病風に吹かれたかと、こぞつて笑うでしょう。それこそただの侵攻ならば、これらも気にする必要がなかつたのでしようけれどもね」

それから二刻馬を走らせたであろうか、ようやく目的の虎牢関の姿が見え始める。なるほど、関とはよく言つたものか、谷間の中央に要塞を置き左右の隙間を城壁で埋めている。※本来後漢の時代では虎牢関は関ではなく、城塞であつたらしい。汜水関と虎牢関は今回同一の物の別称として扱う。左右の薄い城壁を攻めようとすれば城壁と要塞からの攻撃、普通に前方から真っ向に攻めても高く頑丈な門扉。難所の名を欲しますにしておろう。

「そろそろ戻りますわよ、これ以上は目立ちましょ。いつ他の諸侯も着陣するかわかりませんし、挨拶に来たときいなければあとが面倒ですわ」

「ふむ、そう言ううちに遠目にて気づかれたようですが、非常に目が良いものがいるようです。広目天の千里眼もかくやとこそ、これで顔まで判別されていたら笑えましょな。今はまだあちらも様子見のようですが……、これ以上滞在すると向かつてくるでしょう」

「広目天ですか？」

「遙か西より伝来した教えにある千里を見渡す者の名です。あまり広く知れ渡っているものではないので、知らなくてもよろしいでしょう」

「そうですわね、興味も殆どないです」

そこまで呴き共に踵を返す。元々そこまでの情報は必要ない、單に興味がてらに有名な戦場を眺めに来ただけである。彼女と話す呂誕、そして少し離れた位置よりそれを眺める親衛隊。このとき袁紹は外套をまい、その目立つクルクル頭（髪型であり中身の話ではない）をストレートに降ろしていた。金髪は目立つが、これだけでも結構印象が違う。虎牢関にもそこまで一（人影がギリギリ見えるぐらい）近づかなかつたので、彼の言つたようにおそらく誰かという所までは気づかれていないだろう。

「しかし、自分でやつたとはい、あの鎧は目立ちますわねえ」

「ここからも光の反射が見えますな。ですがよろしいのでは？晴れの日ならば弓で狙われた際には田くらましになるやもしれません」

そう簡単に董卓軍の兵が出撃しても追いつけない位置まで馬を走らせ、その後は歩かせる。毎度のごとく呂誕は横に、残りは前に三騎、後ろに四騎である。

「……確かにそうかもしませんが、朝駆、夜駆には絶対使えませんわね。普段は私のように外套を用意させましょうか？全く、軍とはお金がかかりますわ」

「ならば軍が必要のない、姫様が漢を再び立て直せばよろしいでしょう。あなた様が立ち、天下に名を轟かせるのはそれこそ袁家に使える者たちの悲願でありますぞ」

「……そう簡単にそれができたら困りませんわよ」

消え入りそうな、隣に居る呂誕には聞こえるか聞こえない程度に咳き、最後に袁紹は烏鵲を駆けさせ、前をゆく三騎を追い越し陣へと走り去る。もちろん他の者も慌ててそれを追うが、かたや名だたる馬に匹敵する烏鵲、もう一方もそこそこ名馬であるが、流石に烏鵲には及ばない。彼らはあつという間に引き離され置いてかれてしまった。結局彼らが彼女に追いついた？のは、陣の入口の前で袁紹が勝ち誇った目で親衛隊員を眺めている所であつた（人はそれを最後まで追いつけなかつたと言う）。

トキを知る

いくつかの天幕を無理矢理つなぎ合わせたような大天幕、その中に数多の諸侯が集まっていた。北は公孫、南は袁術、東は陶謙、西は馬騰といつた具合である、もちろんその中には曹操、劉備、孫策と言つた三国志での英雄も居るには居るのだが、今はまだそこまでの地位にはいない。曹操の後ろには北郷一刀、夏侯淵、劉備の後ろには関羽、諸葛亮、孫策の後ろには周瑜、黃蓋といつた名だたる将も控える。もちろん他の諸侯の後ろにもそことそこの名の知れた人が控えている。そして天幕に入つていく袁紹、彼女の後ろには田豐、文醜が付き従う。

「おーほつほつほつほつほつほつほつ（おざ）つほおざつほお、（ふう慣れな
い」とはしないほうがいいですね）。

みなさん、良くワタクシ、そうワタクシ袁本初の檄に集まってくれましたわ！」

高笑いする袁紹を冷めた目で見る諸侯、若干青筋が立っているのは氣のせいではないであろう。それは何故かというと、彼らが集まつて一刻、諸侯が使者を立て彼女を呼びに天幕まで向かつて更に一刻ほど経つているのである、待たせ過ぎであつた。もちろん態とであつたのだが、彼は内心申し訳なさでいっぱいであつた。

「どうでもいいけど、麗羽、さつさと軍議を始めましょ。いい加減待ち
くたびれたわ、いくら名門とはいえやりすぎ」とは思わなくつて?」
「何を言うのですか、孟徳さん、ワタクシそこまでみなさんを待たせた

て来ているのですわ」

「はあああ、そうね。それでは袁本初殿、開議をお願いしますわ」
「これより反董卓連合の軍議を開始いたしますわ！」

おーほつほつほつほつほつほつほつほつほつほつ

この時ほんどの人は思つた、毎回失敗するならやらなければいいのにと……

ついでにやつぱり袁家は馬鹿なんだなとも……

それから軍議が始まり数刻、諸侯は未だに方針を決めかねていた。とりあえず盟主すらまだ決まっていないのである、何も決定しようがない。誰もが名声は欲しいが厄介事はゴメンなのである。袁紹としては袁術あたりが名乗り出てくれないかな、やつぱり自分でやらなといといけないのかななんて考え、鬱になりながらも態とらしく自分やりたいですよオーラ（偽）とそれっぽい微妙な発言を発していた。

「そんなことなら袁本初さんがやればいいと思いますっ！」

突然席より立ち上がり叫ぶ劉備、そしてそれを見つめる諸侯。誰だお前的な視線によく言つたぜ的な視線を一気に向けられた劉備は、小さく「うつ」と身じろぐがすぐに体勢を元に戻す。後ろでは諸葛亮が「やつぱりやつちやたよ、この人」と、こめかみを抑えて頭を左右に振つていた。おそらくほぼ全員が彼女を盟主にしようと当然のごとく考えていたが、彼女を推せば「袁紹のことだ、厄介事を押し付けるに違いない」と、これまた当然の如く思つていた。それ故の贅辞の視線で、ほとんど名前が売れていない故の誰だ的な視線である。

「え～確かあなたは～」

「劉玄徳よ、麗羽」

「ああ、そうそう劉玄徳さんでしたわね」

態とらしく知らない名前を思い出そうとする彼女にすぐに割り込む曹操。この時、劉備としては、檄の内容（実は袁紹の書いたものと田豊の注釈合わせて一組で届けられた）勅命であることと、洛陽の現状（悪政は袁紹が使者から聞いた内容であるが）に憂いてここまで来たのだ。早々に開放したいと考えここまで来ているのに、今の何も話

が進まない状況は問題である。

「そうね、劉玄徳の言うとおりだと思うわ、麗羽、貴方なら十分盟主として諸侯を纏めることが可能なのではなくつて？」

気持ち悪いぐらいニコニコし、劉備の考えを推す曹操。もうめんどくさいしようやく生贊が出てきたんだからからさつさと決めろよ、的な笑みである。

「え～それでは不本意、不本意ながらっ！劉玄徳さんがそこまで言うならばワタクシ、そうワタクシが盟主を務めさせてもらいますわ！」

ぶつちやけやりたくないが、さもともやりたかったですよ的にテンションを上げる。正直袁紹本人、彼女は彼女でさつさと自分の本拠地に帰つてベットに飛び込んで惰眠を貪りたかつた。それでもお話的にやらなければいけないのが、非常に頭が痛いところである。では今度はお話無視してやらなければいいというだけだが、そうしてしまうと今の董卓のポジションは確実に袁紹となつていたであろう。過去にマジギレして宮内で大立ち回りしたことを普通逆だが「己」がやつたことに反省はしていない、でも後悔はしている」的に思つていたのだ。この時少しばかり何顯のムチャぶり（反董卓連合結成の原因）に頭を抱えたい気分になつた。

「それではっ！そんな劉玄徳さんに先鋒という名譽を！名譽を！与えますわ！感謝してくださいなつ！」

劉備如き弱者ができるはずがない、やはりそうなるのかと他の者たちは思いつつそれを命じた袁紹をある者は馬鹿めと見つめ、ある者は劉備へと哀れみの視線を向ける。なんせ、名だたる優将である張遼に華雄が虎牢関には籠つてゐるのだ。真当に当たれば、たかが平原の相と義勇兵しか抱えない劉備では一瞬で壊滅させられかねない。その

他の大勢力の諸侯でも下手をすれば、正面切手城に挑めば大被害をうける恐れがあるのだ。劉備は自分の発言でやらかした失態に青ざめた。

「も、申し上げましゅつ！」

見ていられないと思わず声を上げる諸葛亮、その顔は劉備と同様真っ青である。低いながらも地位を得、ようやく見えてきた理想への架け橋が無くなりそうなのだ。諸葛亮的には自分の首を賭けてでも、次につなげればいけないのだ。

「あら？ 貴方は？」

そしてわざとらしく視線を移す袁紹。内心ではやはり来たかと、しかしこなればどういった風に兵を貸し出そうかと考えていたところである。

「劉備旗下の諸葛孔明と申しましゅつ！」

こんなところでもカミカミである、流石はわわ軍師。もちろん本人的には笑い事ではなく、衆目に失態を晒してしまった、状況合わせて蒼白ものである。

「それで諸葛さんは何を言いたいのかしら？」

「私たちは一回の相でしかありません！ どうか袁本初さんに援助をしてもらえないでしようか！ 名門である袁本初さんならきつと簡単なことだと思うんでしゅつ！」

内容を確認し、心の中では微笑ましそうに彼女を見る袁紹。諸葛亮は結構な萌えポイントであつたのであろう、本来なら絶対に蹴るようなお願いである。まあ、演義や横山三国志の影響で劉備好きの袁紹と

してはもちろん融通利かせるつもりであるが。

「そうつ良くわかつてますわ！えゝと諸葛ほうめいさん！」

この、この名門である袁本初に何でも言つて『らんなさいな！』

言質をとらせて、やつぱ馬鹿だわと思いつつ彼女を見る曹操達。ある意味彼女の手のひらで踊つているとも知らずにである。この中で田豊のみ、南皮の城壁の上で一人こつそり盃をかたむけ呟く袁紹を見たことがある。本来の彼女そのままで言えば、なかなかに聰明、民のことと思い、知らない者まで気にかける姿も知つてゐる故か、とても優しい目で見つめる。優しいが何か勘違いしてゐる袁紹だからこそ、いつも話を聞いていないよう振舞う袁紹の元に田豊はいるのだ。

馬鹿のフリをする、それがお芝居であると、自分がわざと不遇に扱われてゐるようだが、実際には田豊長年の経験もあり、田豊彼女が進言したことで民のためになることは、ほぼ全て氣づけば実行されているのである。そして彼女は軍師である自分が、そんな彼女のある様に、黄昏る袁紹の姿を見るまでは気付けなかつたことに恥じていた。

それ故、本来の彼女の功績がなかつた事になつてゐる事にも目をつぶり、彼女がなぜ演技するのかは知らないが、袁紹が満足するまでは、もしくは自分に話してくれるまでは、袁紹を以前の馬鹿な子を扱う様に努めていた。本来なら遙かに年上である彼女は袁紹を抱きしめて優しく甘やかしてやりたかつたが、それをすれば何をしようとしているかわからぬが、彼女の考えを否定するかもしれない、そうすることも抑えて……

「そ、それでは兵一万と兵りいうと装備をお願いできますでしようか！」

「へ、兵一万ですって!?」

「できるわよね、麗羽。なんたつて名門なんですもの」

「曹操さんあなたねえ！ワタクシの兵力の八分の一ですわよつ！」

「へえ～できないの、あ、あ、あ～、名門で行つても」

「も、もちろんできますとも！」

「そ、よかつたわね劉備、袁紹が一万貸してくれるそうよ」「

もちろん一万はさすがに多いな」と思いつつ、元々貸すつもりであつたので、いかにも乗せられた様にする。ここまで騙せていればある意味演技チートである。ダメな方向にしか使っていながら非常に残念な話であるが。と言つても、ただ適当に生きるだけで良いので、身の丈に合つていらない賢人のふりをするよりは普通に楽である。

「あ、ありがとうございます、袁紹さんっ！わたし袁紹さんのことあまり良い」

「桃香さまっ！」

「いい人だつてずっと思つていましたっ！」

また、危ない発言をしそうになつた劉備を諸葛亮が一喝する。本来彼女が言おうとしたことの内容に当たりが付くゆえにコントをしているふうにしか見えないが、あえて其のへんは無視して機嫌を良くする。しかし、分かっているのだろうか？以前彼女は袁紹に旗揚げの援助をしてもらつてしているのである。あれのおかげで本来の苦労の数分の一しかしていないことを。

「うふふ、劉備さんこれ以上ワタクシを褒めても何も出ませんことよつ！」

既に中の人は精神年齢30代（笑）の大台に乗つている、感謝されたいわけでもなかつたが、流石に劉備のこの扱いには（別にオレ悪いことしてなくね？）と心の中で涙した。

二度目になるが、恋姫含め彼女は劉備好きなのである。

「七乃くこれはいつになつたら終わるのじや～？」

「きつすが、お嬢様！毎度のごとく空気が読めていませんっ！大丈夫ですよ、お嬢様の可憐なお声で麗羽様にお願いしたらすぐに終わらせてくれますよ！」

ほんと空氣であつた袁術、彼女の性格からしてはよく持つたほうである。袁紹が余計なことは言わないよう張勲へ蜂蜜の壺を渡して交渉していたのである。本来は騒ぐなという意味で渡したのだが、まあ、それを張勲は袁紹が盟主になりたいからと、そう受けとつてしまつたわけだが。

「のうー麗羽姉さまー、さつさと終わらせたもー」

「どこまでも棒読み！お嬢様のそこに痺れる憧れるつ！」

「わはははは、七乃くそう妾を褒めるでないつ！わはははははく」

「……し、仕方ありませんわねえ。公路さんがそこまで言うなら閉議しますわ」

結局殆ど何も話し合つてないのだが、他の優秀な諸侯と優秀な部下が勝手にやつてくれるの、問題はない。袁術の発言にて頬を引きつらせ更に頭を抱えたくなつたりもしたが、そのまま袁紹は天幕を出る。



袁紹が天幕を出ると袁術もあとに続くように出るが、他の諸侯はそのまま立たずに天幕に残つたままである。ついでに言うと文醜は天幕を出、田豊もそのまま残り、袁紹達と入れ替わりに荀彧が入つてくる。

「さて、厄介なのが全員出たところで軍議を始めましょうか」

曹操の発言であるが、非常に喧嘩を売つている。とは言つても彼女には、彼女なりに思うところがあつて袁紹を退室させたのだが、それを諸侯は知る由もない。それゆえ単に、厄介払いをしたのだろうと、

本当にそうとだけ思つてゐる。

「袁家の軍勢が戦い、劉の旗印がそれを率いる、此度の戦名を得るのにはうつてつけでしよう。でもね、正直物足りないとと思うの、虎牢の城を落とした先にはおそらくすぐに陣があるわ。ましてや城の先は開けた地、騎馬を操る彼らの独壇場でしよう」

「何が言いたい、曹孟徳殿、我ら足りぬ頭に教えてはくれないものどうか？」

曹操の前口上を遮り、孫策が挑発混じりの質問をする。ちなみに孫堅は未だ生きており、長沙の太守をしている、策では劉表相手に留守をまかせるには少々駆け引きが心もとなかった為、堅自らが睨みを聞かせているのだ。緩く、そして軽くなつていた空気を引き締まるための曹操の前口上である。孫策まだ若く、気が短い、そのため少々空気が読めなかつた。ある意味孫堅の考えは正しく、間違つていた。

「貴方は確か、袁公路の配下についている、自称孫子の末裔だつたから。あなたの先祖の孫子の教えには礼儀がないのかしら？もしそうならば、私の知る孫子ではないわね、いえ、ここにいるどの方々が知る孫子でもないと思うわわかつたのなら、出口はあちらよ？あなたの飼い主と同じくさつきと退席するのね」

「華琳さん、落ち着いてくださいっ！優しく、優しくつですねツ！」

曹操も口では相当なことを言つてゐるが、実はそこまで怒つてはない。内心はため息をつきながら、他の諸侯の仲裁を待つていた。そしてそれを眞面目にとつた張遼によつて取り押さえられそうになつてゐるのはギヤグなのだろう。孫策に関しては、隣に控える周瑜によって前口上の説明を受け、己のしでかしたことには顔を真つ赤にしている。

「……慈協、あなたも麗羽の後に付いていかなかつたのね。と言うよりいつもに比べて静かだから、気づかなかつたわ、寝てたの？」

「ひどいっ!? 華琳殿の中での私の扱いがひどいっ!」

「……はあ、まあいいわ、その顔を見ればだいたいの察しがつくから。本題に入りましよう、袁家との詳細の打ち合わせを劉旗の者はしていただきたい、荀文若殿が任されているそうよ。

それと、……そうね」

少しあくどい顔をしてみせる曹操、なにか思いついたようである。さて、ここでこの場に集まつた諸侯を紹介しよう。公孫家、馬家、曹家、鮑信、劉旗、劉岱、劉子惠、許攸、劉祥、孔融、張家である。参加したものはさらに居るのだが、直接参戦ではなく後方の睨みを聞かせてているのみである。

「孫伯符殿、劉玄徳殿と同じくして先鋒を受け持つてもらいたい。ふふふ、どうせ、自薦するつもりだつたでしようから、大丈夫よね？」

腹黒華琳さん、降臨。

孫家としては、出来レースとわかっている戦において兵を無闇に減らしたくはない、この戦いが終わつたあとには劉表との一戦も控えているのだ。そのため彼女は、無難に戦場の後方で補給でも受け持つよううに母よりは言いつけられていた。曹操もそのようなこと（矢面に立ちたくないこと）は分かつてはいる、だが前口上を駄目にされた仕返しをせねば気がすまないだけであつた。

「……くつ！ 承知した」

「では、残りはそうね、張孟卓殿、此度の盟主である袁本初殿の奔走の友であるらしいから、煮詰めていくつてくださいな」

「ちよつ！ 華琳殿つ!? 許子遠殿もいるのですがつ！」

「……ヒトに押し付けないで欲しいアルネ。賃金払うなら別ヨ」

「味方がいないっ!?」

恋姫の主人公たる北郷一刀や、他の諸侯も結構数がいたのだが、始終空氣であった、気にしてはいけない。皆、惰性で集まつたいるだけ、あわよくば名声を高めようと、もしくは参加しなかつたことで変な悪名など流布されては困るのだ。基本、こういうものは音頭をとつて話をした者が順に利か不利を得ることができる。前者は曹操、袁紹、袁術で、後者は劉備、孫策である。だがしかし、こういったものは加減が必要であまり必要以上に不利ばかりを押し付けると、下より突き上げが来る。これは兵を要求された袁紹である。孫策の場合、先に落ち度を作つてしまつたし、一番槍 자체はそう悪いものではないのだ、そのため何か付けなくとも納得させられた。ここらが上手くなれば、損をするのだ。

この後、虎牢までの先鋒とそれ以降の陣地作成の役割分担、夜の警備の分担だけを決め軍議を終えた。策などはその場の者たちが臨機応変に組み立てるのだ、備えのみ準備してその他は放置である。そして、後方からの補給が一旦届くまで、二日後を目処に開戦の狼煙上がる。

△おまけ▼

田「……いや待て、許よ。なぜ貴公がいるのですか？」
許「甘いアルネ、お金の匂いするところに我アリ。

自分たちだけ旨い汁を吸おうなんぞ、天帝が許しても、この許子遠は許さないアルネ

華「……そういうん問題なのかしら？」

注1、うちの麗羽さんじやなければ、さらし首ものです。
注2、というより、付いて来ていることに麗羽さん気づいてません。

シンを知る

程なくして汜水関から華雄を引きずり出し、打ち取つた劉備軍。この時わずか開戦より二刻であつた、……何があつたし。いつの間にか彼女の知らないうちに、孫策軍が加わつていたため、矢面に立たされた袁紹配下の兵の被害も少なかつた。

ので、袁紹彼女としては非常に満足である。

そしてちやつかり戦場にて、深手を追つていたが生きていた華雄を確保した袁紹、今までこつそりと援助をしていた華佗にお願いして彼女と重傷な兵の治療をしてもらう。援助してくれていた相手が何人かの者を通してたために袁紹と知らなかつた華佗は、呼びつけられた天幕に入つて袁紹、彼女がいたことに驚いて、

「あなたが華佗さんですわね？ 彼女と兵達をよろしくお願ひしますわ。貴方の成したことへのお礼なら、しつかりと考えていますので」と頭を下げられることに二度驚いた。

噂ではどうしようもない人間と聞いていたのだから仕方がないがしかし、華佗が彼女の傘下である州を巡つていた時の彼女の領内の治安の良さと民の笑顔を見て唖然としながらもひとり納得していた。だが他の諸侯はそうではない、彼女の領内の繁栄は彼女の部下の手腕であると思つていたし、彼女自身はバカだとそう決めつけていた。

「なにを惚けていらっしゃるのかしら？ 何かおかしいことでもあつたのですか？」

思わず、素に戻つた袁紹のつぶやき、それを聞いて華佗は我に戻る。「いや、なんていうか、噂なんてあまり当てにならない物、なんだなあとつっていたところさ」

本来なら改まつた話し方をしようとしたが、彼女なら大丈夫だろうといつもの口調で話す。実際、それを聞いて彼女は「はい？」と不思議そうな顔をしたかと思うとクスクスと笑い出す。そしてそれを見て華佗はやっぱり大丈夫だったかと微笑み頷く。

「そうですね、他の方からの評価ではワタクシは馬鹿だったのです

すわね、できれば黙つていてくださいな。誰も信じないかもしませんが、もし曹操さんにでも気づかれたら困りますから」

「でも君はなぜそんなことを……、いや聞くべきではないな、済まない忘れてくれ。それでは治療をはじめようか」

「ああ、申し訳ないのと思うのですけれども、彼女の治療が終わつたら拘束しておいてくれませんか？きっと元凶であるワタクシの陣だと知れば激昂しても仕方ありませんから」

「いやしかし、それを言うなら君はなぜこんな戦いを……いやこれも余計なことか」

「いえ、そうですわね、これを見てくださいな」

彼女は華佗にひとつの竹簡を手渡す。中身はもちろん帝、いや十常侍からの勅命である。

「そうか、そういうことか、君はつくづく嫌な役回りなんだな、そうだ」

「うふふ～華佗ちゃん、こんなところにいたの〜」

突如現れるガチムチ筋肉の巨漢女、貂蟬。

「誰が三日三晩うなされるようなグロデスクな野獣な変態よつ！」

「おい、貂蟬、袁紹殿はそんなこと、というかお前が登場してから、一言も喋つていないので」

珍しく呆れたふうに漢女かのじよ？にジト目を向ける華佗。実際少し袁紹も突如現れた貂蟬に対し悲鳴を上げようになつたが、寸前のところで飲み込んだ。彼がいるところに奴がいても別段おかしくないことを知っていたからである。一応心構えはしていても声を上げそうになるのは、げに恐ろしき漢女であるが、努めて顔には出さず無表情を貫いた。もしかしたら、頬、目の辺りが若干ひきつっていたかもしれないが、許容範囲であろう。

「……あれ？」

「（ダ）ほつん、華佗さん彼女を紹介してくださいませんか？」

「……ああ、そうだな、彼女は貂蟬、そして貂蟬、彼女が援助者の袁紹殿だ」

と言うより貂蟬としては、既に酷評され続けていたので、逆に反応がないのは珍しすぎた、それ故いつものノリで突っ込んでしまったのである。そして、彼は既に慣れたものだが、袁紹が彼女の登場に声を上げないどころか兵を呼ばないことに戸惑い?を覚える華佗。今まで何度治療中の患者から衛兵を呼ばれそうになり、なだめるのに大変だつたか。医療しか考えていないさそうな、医療バカな華佗の唯一の悩み出会つた故である。

「袁本初と申しますわ、挑戦さん」

「なんか字が違う気がするワン、でもいいわこちらこそよろしくお願ひねえん、くねくね」

（これまた不思議な外史ねえん、はああ早くご主人様に会いたいわあん、くねくね）

そして華雄の治療が終わる、華佗が言うには目覚めるには少々時間がかかるとのことだったが、彼が治療を終え退席していた袁紹にその旨を報告して、戻ってきた時には既に華雄は目覚めていた。彼女の生命力に驚きながら（この日は華佗にとつて生涯で一番驚いた日になつた）当初の予定通りに話を進める。

「それでは彼女は悪くないとあなたはおつしやるのか……」

「ああ」

猪武者と有名な華雄も突進グセと激昂しやすい性格がなければ本来優秀な将なのだ。最初に見せた竹簡を読み全てを悟つた彼女はもう少し暴れるかと思つた華佗の予想とは異なり、大人しい今までつた。彼のその後の説明も淡々と聞き、彼の顔を見つめる華雄、既に拘束は必要ないと外してある。

「いや、しかし俺が言うのもなんだが暴れないのか？」

「ん？ そうだな、袁紹の名前を聞いたとき一瞬、力つとしたが、よくよく考えればと納得したのだ。月様と同じく彼女は漢に負い目があつたし、良くも悪くも漢の臣、ましては洛陽から奴を追い立てたのは呂布と私達だ、お前の言う袁紹があの時から今まで我らを恨んでいなかつたということも分かつていた、ならば私がグダグダ言うのも

おかしいだろう。袁紹は全ての元凶は自分だと思つてゐるのだろうが、これは仕方ないとは分かる。奴を恨むのではなく、恨むならこの世だろうさ、ああこれは我らが軍師賈団には内緒だぞ

「そうか、わかつた、袁紹を呼んできても大丈夫か？」

「ああ、安心しろ、奴に掴みかかつたりしないさ」

「その心配はしていなさいさ」

華佗は一応（袁紹も彼に対しては、そこまで必要あるものとは思つていなかつたが）、警護として配備されていた兵に袁紹への言付けを頼む。その後程なくして袁紹は兵に連れられこの場に戻つてくる。その際、流石に心配した兵が着いてこようとしたが、

「何を言つてますの？今から敗軍の将に袁家の素晴らしさを教授させるのですわよ？護衛なんぞ必要ありませんわ」

と言つてそのまま追い出してしまつた、華佗はそのまま放置である。彼がこういつた話を言いふらすことはないと分かつてゐるし、どちらにしてもおそらく、華雄に無理をさせないためにテコでも動かないだろう。彼の心象を悪くすることは避けたい、まあ、自分は追い出されるのに彼が残ることにも、兵からしては心穏やかになれない原因だつたのだが。もちろん兵も引き下がつたが、親衛隊を幕外に待機させることを条件に引き下がる、今は呂誕とその配下周囲を警護している。本来なら親衛隊を目立つこと（人が集まる場所で分かりやすい密会等）には使いたくなかった、曹操より返却された兵の中に、ほん必ず密偵がいるからである。このような事をするには曹操だけではない、袁紹も兵を貸し与えた時に密偵を送り込んでいるし、袁紹が命じたとは考えてないが、彼女の配下の誰かが命じてゐるだらうことなど、曹操もそれぐらい承知してゐる。劉備に援助する際も、商家を通じて何顛伝いに袁紹は情報を得てゐるのだ。

だが、妥協せねば流石に彼も納得しまい、ついでに彼は袁紹が度胸が座つている人間、駆け引きが上手い人間とは思つていないので、「自分の命が危ないと、そんな事もわからないのか」と単純に馬鹿にされ

ている。

「初めましてですわね、華殿」

「いや、一度会っているぞ？貴様を洛陽から追い立てたのは私だ。もつとも顔を一瞬見ただけで会話をすることはしていないがな、……どうだ？恨むか？」

「あら？何のことでしょう？ワタクシそのような事覚えていませんわ」

これは少し遠まわしであるが、気にしないの意である、そして本題に入ろうとの意味もある。袁紹としては宦官を消すために宮内的情報を早急に集めなければならぬ。洛陽に潜り込んでいる、密偵もいるが、どうしても市井に紛れ込むだけのため、宮中の話など噂に毛が生えた程度しか入らないのだ。それに比べ、董卓の配下であつた彼女は宮中に入ることもあつただろう、なくとも洛陽民より深い話を知つてゐるはずである。

「ふむ、では何が欲しい。あいにくだが、我軍の構成や守備に関する話せんぞ、治療してもらつてなんだが、早々に殺せ。たとえ拷問されても話す気にはならん」

「要りませんわよ、戦うのは他の皆さん役目ですもの、ワタクシには関係ありませんわ。そうですわね、ああ、今から話すのは独り言なのですが、今回の戦い二つ意味がござりますわ。一つは宦官による貴方達への謀、もう一つは清流派による宦官への謀」

「……それは、いや、まさか、だが」

これだけの話の内容がわかつたのか、華雄は少々考え込む。清流派の噂も、彼らが何を成そうとしているのかも少し中央に入れれば自ずと耳に入るのだ。彼ら清流派が望むことは一つ、濁りきつた汚職はびこる宦官共を排し、宮中へ新たなる流れを作ることである。ならば彼らが謀ることは一つ、宦官の根絶やしであろう。

「一つ、条件がある、董仲穎様の身柄の安全を確保していただきたい。他の者は臣である、覺悟は出来ているだろう。戦いに出てくる彼女やつらの命乞いは無理だろうからな、どうか彼女ちゅうえいだけでも今後をお

約束願いたい

「おそらくそれに関しては問題ありませんわ。非常におせつかいな方が軍中にはいますもの、眞実を知つたら助けようとするでしょう。まあ、ですがワタクシの手の中に飛び込んでくるのならば、命含め今後の生活も不自由させないと誓いましょう」

「そうか、ありがたい」

袁紹よりは詳しいといつても華雄の知ることはそこまで多くはない、人を疑うことが大好きな宦官どもは警備の穴など敵になるやもしれぬ者に渡さぬのだ。華雄が知るのは、袁紹が洛陽から立ち去つてのちよつとした人事異動や、董卓主導で行われた城壁の補修や区画整理だけである。もちろん、これは兵を配置し、城壁の中に何を詰めるかなどを周囲に知られないようにしている。

城壁の中身が岩か、はたまた土かで若干強度が変わるものだ、未だに新たに作られた城壁は警備の兵が多く配置され何があるのか知られていない。袁紹はおそらく区画整理と城壁の補修で、隠し通路、宦官の脱出経路でも掘らせているのだろうと、当たりを付ける。生き汚いのだ、奴らが建物を建てるよう命じたら基本そういうものを作る。董卓主導といつても、董卓は金を出しただけであろう、全て職人と子飼いの者たちが手がけていると見た。出来上がつたら職人も子飼いも消される確率が高い、洛陽に入つたら真っ先にその城壁と区画整理付近を抑え、職人も子飼いも確保すべくであろう。運が良ければ逃げようとするゴミ共を排除できるのだ。

「ありがとう、これだけ分かれば十分ですわ。さて、話は変わりますが、貴方は今後どうするのですか？」

「どうするとはいいかに？」

これには非常に困る華雄、なにせ敗将に今後を決めさせようというのである。いらぬ事まで知つた（袁紹の本性）華雄は邪魔物以外ではなからう、彼女による最後の願いとしての董卓の助命も通じた今、このまま始末されるものと考えていたのだ。だが、袁紹はどうするかと聞いた、華雄は袁紹が自分を試しているのではないかと考えた、まさか、華雄が望めば開放する等思いもしない。

「二君に仕えるは恥であろうか？」

「そのようなこと私が知るはずもありませんわ、周りの人に聞いてくださいな。でも、我が陣営に来ると言うならば歓迎しますわ。この場、あなたを切つた美髪公の陣、劉軍ならば我が陣を西より出て少し行けますわ。ああ、そう言えば、また何か要求されそうですわねえ。劉青州平原相はともかく、諸葛孔明は狸もいいとこですもの」

「……それを何故私に愚痴るかわからんが、私は貴殿に仕えたい。袁本初殿、敵である我が身を救つたばかりか、我が願いを聞き届けてくださるという。

我は華、真名も、字も持たぬ、董家により市井より取り立てて貰い、華のようで雄々しき者と称され申した。

華とは恐れ多く、学も無き雑草にございますが、どうぞ貴君の下にて残りの生を過ごしとうございます、返答やいかに」

両膝を付き、右手を握り、左手を包み込む抱拳礼、武官の恭順の礼の一つである。他にも礼には天揖等や土下座のようなものもあるのだが、彼女が知るのはこの礼のみである。頭の回りは早くとも、血氣逸く、軍学しかないのだ、儒教の教えなどほぼ知らぬ。

「華よ！これより姓を華、諱を雄、字を雄葉ゆうしょう、真名を順羽とせよ。我に仕えるのだ、よもや異論はなかろうな！」

「承知！これより、華雄葉身命に注ぎ忠節を誓いましょう！」

こうして、新たなる心強き忠義の士を得た、麗羽さま、はたまた何処へとゆくのでしょうか？

たゆたう命の螢火の如く、進むははてなき天の道。

これより先は悪鬼はびこる惡の道、ああ、進むはどこまで死への道。いかにして袁家の本初は天を盗る。

知るは知らぬは偏に北斗、南斗の仙。

語るは管路、消えるは羽が、散る火も美し、栄華を誇るは三国の、浅

き夢見し胡蝶の夢を。

儒は知らずとも、義は知ろうぞ、義は知らずとも、主は知ろうぞ。

△おまけ?▼

人払いを終える、すぐさま外に待機していた親衛隊に兵を一般に交代させるように命ずる。程なくして、天幕周囲の人払いよつて離れていた声が、元に戻り出す。おそらく、報告も緊急以外は控えさせていたので、何かしら挙つてくるだろう、喧嘩などは多めに見るようにな言つているが、人傷沙汰も軍中では少なくないのだ、剣を使わねば良いのだが、それ以上は許せない。

「やめるアルねー、離すアルねー」

「元皓さん、なんでそいつがいるんですの?」

「……本人に聞くべきでしょう、どうせ下らんですがね」

襟元をもたれ、田豊に引きづられる許、であるが、体格差を考えれば当然、ほぼ背中の全てが引きずられている。恐ろしきは恋姫世界の服飾であろうか、汚れはしているが、破れてはいない。ポリエステル以前に、こつちのほうがすごいと思うのは袁紹だけであろうか?そして残してきた人間がなぜかいることに驚く、袁紹、その斜め後ろには華雄が早速立っている。それを一瞥するだけで、なんとなく納得する田豊、己が主のことだ、それぐらいはわかる。だが、若干日の光が消えた田豊、本気で切れている。

田 「本初様、此度の命違い、許せるものではありませぬ。

本拠地の守護という大役を授かつておきながらのこの行為、打ち首では足りぬかと」

麗 「そうですわね、……許よ、申開きはありませんか」

許 「ワタシハワルクナイネー、ワタシハワルクナイネー」

華 「本初殿、新参なる私が言うのもなんだが、このふざけた奴は一族郎党切つてもよいのではいか?」

麗 「……許よ、もう一度聞きますわ」

許 ? 「くつ! バレてしまつては仕方がないアルねつ! 私は許は許でも曹家に仕える許褚アルねつ!」

許攸なんて美しく可憐な美女ではないアルねつ!」

麗・田・華 「「な、なんだつてえ!」」

許 (ふふ、計画通り)

田 「では本初様、打ち首でよろしいですか?」

麗 「そうですわね、華よ、貴方の武にて一断ちしなさいな」

華 「承知!」

許 「ひいいい」

この後、機嫌がいいことを理由に一応許された許攸、あとにも先にもある時の田豊は怖かつたと語る。

あれだよ?これが後の許攸の出奔フラグなんて事は……ないよ? 多分。

ホシおちる

いかに勇将揃おうとも精銳であろうとも敗れるときにはもちろん敗れるものである。今まさに洛陽は完全包囲され鼠一匹通さぬとばっかりの風体をなしていた。

「本初さまが総大将でありつつも、我が軍は体良く扱われ何ら一つの戦果を挙げておりません」

此度の作戦に参加した将兵のうちの一人である。

「黒騎を使いなさい、少々の家探しならば許可します。盗みはないようだ」

そう簡単に命じ、開門した洛陽へと兵を進める。劉備達主だつた武将たちはおそらく既に場内へと侵入しているだろう。彼らより先に董卓の身柄を確保しなければならない。懸念は一つ、呂布である。劉備達はその性格からして彼女の動物たちに敵対されることなく、主だつた戦闘もなく言い方は悪いが、口先だけで董卓直下を丸ごと収めた。しかし、袁紹の配下の黒騎は良くも悪くも訓練された純粹な兵士である。このことがアダにならなければ良いがと袁紹は考えた。

そしてその嫌な予感は当たつた。

「報告！劉玄徳配下により黒騎が壊滅！死者はおらずも、重傷者多数！」

「……やつてくれましたわね」

数万の本隊には城外待機を命じ、すぐさま袁紹は一部の精銳を連れ立つて洛陽の門をくぐる。足止めするようには既に伝えてあるので、劉備たちはその場所に董卓たちと居るだろう。

華雄を得たことによつて、ここに来て欲が出た、少し前までは劉備達に任せることにしていたのだが、恋姫における黒幕連中を相手に逃げ切るには有能な将は多くいてもらいたからである。上手くいけば彼女ら全てを傘下に加えることができるが、いくつか問題がある。彼女たちに道理が通じるのだろうか？しかも、伏竜鳳雛も両脇に居よう。口先に翻弄され上手いようにあしらわれないだろうか？そんな心配もあるが、まずは兵が足止めできている間、逃げられる前にたど

り着かねばなるまい。

ほどなくして目的の場所、洛陽市街の一角へとたどり着いた。そこには黒騎に所属しているものが、どこかしこに伸びている。仰向けになつたものや動けなくなつたもの、死者はいないうだ。救援として向かつた者も粗方のざれているらしく、今現在の動ける黒騎は袁紹の隣に立つ二人呂誕、郭援のみである。その他の隊長格は現場指揮をしている際に今ここに転がる者立ちと同様に吹き飛ばされていた。

（舐めている、確實に。この私が率いる兵だからこそ、無体を働くとも口先だけでどうにかなると思つていてるのだろうか？）

「さて、これはどう言うことでしようか？劉玄徳さん？」

「あ、私の名前覚えてくれたんですね！」

「桃花様！このような時に！」

悪びれた様子もない、いい事をしたとそう思つていてるのだろう。彼女からしたら董卓達を探すためとは言え家探しをしてた黒騎達は賊にも等しいのだろう。強制捜査であるから勿論押し入る形にもなる。パツと見では強盗が金目の物を探しているのと何ら変わり無い。ましてや、弱卒ばかりと侮られることが多い袁紹軍である。此度のことは規律の取れていらない者がおこした、指示に背いた略奪と彼女たちが判断しても何らおかしくない。

だがしかし、それが何より袁紹には悔しかった。黒騎達は自らが手塙にかけ育てた精銳、しかも論理も道徳も持ち合わせ、悪であつても正義であつても必要ならばと割り切れる非常に優れた存在。自らの指示が原因であるとは言え、綺麗な幻想を抱く彼女たちには賊と勘違いされたのだ。それが何より悔しかった。華雄の願いもあつた、呂布等を手に入れるため董卓を無傷に押さえておきたかつたという思惑があつたにせよ、あまりに納得しがたい。さらに言えば常人よりも遥かに格上であつたとしても、恋姫には敵わないのが分かつてしまつた。あれだけ装備にも気を遣い、死傷し難い装備を与えてもコレである。彼女たちが黒騎を斬ろうと思えば甲冑^{オレ}と真つ二つにできるのであろう。

「袁紹さん、この黒い人たちとは、えと、」

「言い辛いのならば、桃花様代わりに私が話しましよう、袁本初殿にはこの痴れ者たちの処分をお願いしたい」

この時袁紹は思わず猫をかぶることも忘れて自らの唇を思いつきり噛んだ。それに気づいた呂誕が彼女の裾を小さく引く。呂誕の方を向ければ、僅かに首を振る。

（気にしないでください）

彼の目がそう言つていた、思わず隣の郭援を見れば頷く。袁紹もうだが、彼らの部下が痴れ者と称されたのだ。腸煮えくり返る思いで溢れていても可笑しくはない、それであつてもこの忠君。袁紹はここで終わらせてはいけないと、いつもの調子を取り戻す。

「まあ、劉玄徳ありがとうございますわ。あとは適当に元皓さんにでも任せますので」

「……それでいいのですか？」

適当に流し、目的の人物を見つけようと劉備たちの後ろを観察していた袁紹に声がかかる。そこにいるのは伏龍、諸葛孔明その人であつた。そこにはいつもの気弱そうな彼女の姿はない。

「……何がでしょう？」

「君主としての役目果たさずして、この乱世においてそのような生き方。恥ずべきことと

お考えにならないのですか？上に立つ者には責任があります、民草をよくまとめ帝より授かつた君主として君臨するのであれば、自ずとやるべき事は見えてきましよう。ですが、今ここであなたを見る限り何かを成す氣概すら伺えない。名門と謳われ、それを誇るのならばなぜ、」

「あまり長くお話されても、聞き取れませんわよ？何か言いたいことがあるなら、後で書面で纏めなさいな。気が向いたら読んで差し上げますわ」

諸葛亮は絶句する、袁紹を見かねての忠告をバツサリ切り捨てられたからである。これはお前の話は聞くに値しない、とそう言われたに等しいモノ。その他の劉備軍の面々の袁紹を見る目も劉備その人と何も理解していない張飛を除いて冷たい。

「……貴方に道理をどうと思った私が愚かでした」

「そう、ならばいいですわね？ああ、そうですわ。貴女たち動物の群れを見ませんでしたこと？」

突如して変わった話の流れ、心当たりがあるのか袁紹の言葉に過剰に反応する。その剣呑な雰囲気に黒騎の一一名は剣の柄に手をかける。「なぜそんな事を聞くのですか？」

「簡単なことですわよ、ワタクシが洛陽にいた頃にこの辺に動物の群れがいましたの。ふと思い出したので彼らに探させていたのですが」

そこらに転がる黒騎を一瞥する。ちなみにこの辺りで動物の群れを見たのは事実である。それ故にこのあたりに呂布たちもいるだろうと辺りをつけて黒騎を送ったのだ。そして、劉備たちの後ろで存在なさげにビクビクと怯える侍女服の少女二人。やはりそこには動物たちはいないことから呂布はいないようと思える。ここで袁紹は漸く目的のものを見つけるに至つたが、彼女たちをどうやってこちらに渡してもらうか考える。おそらく彼女たちが董卓だと既に劉備軍は知っているのだろう。それゆえの先の反応。普通に渡せと言つて渡すとは思えない。

「劉玄徳さん、ワタクシ今、現在散り散りになつて逃げ出した宮の者達を保護していますの。彼女たちを渡してははくれませんこと？御札はしますわよ？まあ、渡さなくとも痛い目を見てもうることになるだけですから、それでも良いのですが……」

劉備がすぐさま断ろうとするのを隣の鳳統が声を出す前に慌てて止める。ちなみに既に洛陽外にある彼女たちの1万800人程の陣は呂布が逃げ込まないよう包囲してあるし、今の劉備軍の9千は袁紹の持つ軍の中でも中堅程度の強さを持つている。残りの劉備軍を捕縛なり撃破するなりするのは流石に容易い。面倒な恋姫たちはここにいる。そして彼女たちが今袁紹に手を出すことはまず確実にありえない。袁紹が原因とはいえ兵を借りて、名声のために反董卓連合に加わったのだから、本来なら先鋒を命じられても彼女たちは文句を告げる資格はないのだ。戦において弱小勢力から使い潰すのは

当然であるし、この戦に参戦することを献策した伏竜鳳雛が理解していないわけがない。城攻めの戦力の殆どをこちらが担っていた事だし、つまり、こちらに借りがある。仁義に反するからだ。

鳳統が劉備の耳元で何かを告げるのが見て取れる。まあ自ずと内容の予想はできるが。

「お願ひがあります、彼女たちの素性は聞かないであげてください。彼女たちはどこぞの落胤であり、あまり人に知られたくないようなのです。それと、図々しいとは思います、兵はお返しますが、余りの兵糧はそのまま譲つていただきたい。それが可能なら彼女たちをお渡しします」

「……構いませんわよ、呂誕！ 聞いたな、兵に告げよ。劉備軍へ供与した兵の接收、及び包囲の解除を。それと中軍のよりすぐり500騎をここに送りなさいな。その後路地を固めていた兵は治安維持に当てよ」

「[.]」

「懸命な判断ですわ、ワタクシ少々イライラしていましたの。お猿さんたちの処分は終わりましたが、どこぞの誰かさんが御せいなかつた将が帝を長安へお攫いしたものですから。良かつたですわね？ ここで終わらなくて」

少々爆発気味だったのだろう、ここに来て最後の最後で袁紹はかなり猫を被るのをやめていた。ぜんせ以前のお気に入りの恋姫たちが、こちらを嫌悪してきたこともそうだが、情の湧いていた黒騎を賊呼ばわりにした事、結局のところそこまでして猫を被る理由はなかつた。もちろん彼女達に今知れても何の問題もないことも理由に含まれる。最後に言えば、華雄のお願いを聞けないことのほうが今現在の袁紹にとって頂けないことであつた。ここに来て一部の敏い者がようやく自分たちの間違いに気づく。今頃軍師連中そこにいる董卓軍軍師の賈団含め『やられた』と思つてゐることであろう。

当然、董卓達も劉備達も騙されていたことに気づいたが、袁紹の様子から二人が董卓と賈団であると気づいていることまでもは察してはいない。つまり、大人しくして嵐が通りすぎるのでやり過ごすしか

ないと思つてゐるのだ。賈団の内心としては、今ここで懐に持つた短刀を袁紹に突き刺す為に走り出したいものだが、そんな事をすれば確実に董卓は死ぬ事になる。そのために今は抑えていた。

そして、援軍の到着を以て袁紹は実際に先ほどの言葉を本当にするためには、宮廷の侍女や文官の生き残りを保護し陣へと連れ立つ。陣に着くなり、すぐさま呂誕に命じ、袁紹が「飽きたから帰りたい」と言つていると、主だつた将兵に伝わるように告げる。これでほどなくして陣払いが開始されることであろう。報告をさり気なく聞くに、曹操と一部の者たちは獻帝の保護とそれを連れ去つた者たちを追撃するために兵を動かし始めているらしい。

歩くうちに華雄が待つ天幕へと訪れる、もちろん縛つてはいないうが、ほぼ拘束氣味に董卓達は彼女の後ろにいる。

「華雄さん、連れてきましたわよ」

後ろの方で、袁紹に告げられた名に董卓達は驚いていることである。華雄もまさか袁紹が董卓達をそのまま連れてくるとは思つていなかつたので、何のことだか理解していないらしい。人払いをし、周囲を直属のみで固める。田豊達が訪れた際には一拍置くように入り口を警護するものには告げる。

「さて、董卓さん、賈団さん、お入りなさい」

「全部知つていたのね、やられたわ」

「……詠ちゃん」

「大丈夫よ、月。袁本初そうでしよう？華雄を態々生かしているくらいですもの。何の目的かは知らないけどね」

入つてきた人物を見て、大泣きし出す華雄。慌てて董卓は華雄へと近づき慰め始める。それでも華雄は袁紹に礼を告げながら泣き止まない。そしてそれを溜息つきながら苦笑いする賈団。

「おかしな話ですわ、今回ワタクシが激を飛ばしたことが発端ですのよ？」

「袁本初、その言葉で大体察したわ。アンタに恨みがないと言つたら嘘になるけど、忘れてあげる。そもそも月はあんたを恨むなんてこ

と、日輪が落ちてもないだろうしこれで一件落着よ、良かつたわね

「言葉の端々に刺がありますわよ」

「当たり前でしょう、仕方ないとは言え涼州も結局流れから言つて失う事になるだろうし、アンタのせいで兵も代々の土地も全部失つたのよ。少しぐらいは甘んじて受けなさい」

そうこうするうちに漸く話ができる程度に華雄が治まる。未だに鼻声でグズグズ言つているが、この調子だとふとしたことでも感涙しそうなので、話を無理やりに進める。

「董卓さん、賈団さん、貴女たちに選択肢を上げますわ。このまま本当に侍女になるか。華雄さんと同じように名はえることになるでしようが、ワタクシが傘下に加わるか……どちらを選んでも何不自由ない暮らしさは保証しますわよ。ワタクシとしては将になつて欲しいところですが」

「ボクは軍師として使つてくれるというなら、下についてもいいわよ。月は侍女にでもらえる？ 荒事は向かない子だから、矢面に立つようなこと今後無いようにしたいの」

「それで董卓さんはいいのですか？」

「はい、詠ちゃんは軍師として働きたいようですし、私は政治にも軍事にもあまり向いていませんから」

「謙遜を、貴女の操る騎馬隊は屈強であることは知っておりますのよ？ まあ、性格が荒事に向いていないのでしょうかけど」

「うんうん、良かつた良かつた！ 麗羽殿感謝するぞ！」

完全復活を果たした華雄。ここでようやく会話に参加しだした。若干なぜか、喧嘩をした子を見守る親目線な気もするが。といつても話の内容はあらかた終わつてるので、後は本拠地に帰つてから詳しい登用内容は決めないとけないだろう。袁紹としては賈団と華雄は黒騎の将にするつもりである。今回の劉備軍のことでの如何に一般と恋姫たちの格差があるか理解できたことは不幸中の幸い、僥倖？である。

その後、負傷した黒騎たちの問題もあるので、天幕に彼女たちと警護を残し後にする。あまり田豊を放つておいても後々面倒くさいこ

とになるからだ。今頃洛陽に袁紹自ら入つたことでオロオロすることであろう。あの見た目で一応老婆？であるので心臓に悪いことは余りしていないつもりだが、今回のこととは田豊卒倒レベルなので実は結構袁紹も慌てていたりする。気づけば大分早足で本陣の天幕へと向かっていった。

予想通りというか、

「あやあやあやあや！麗羽殿、麗羽殿！ご無事でありますようか！」

「老老く、姫なら大丈夫だつて、何だかんだいつて雑兵ぐらいなら斬り捨てる能力持つてんだからさく」

「ちよ、ちよつと、文ちゃんあんまり適當なこと言っちゃダメだよ。麗羽様に何かあつても困るんだから！」

天幕の中を歩き回る白髪幼女に、足組んで偉そうに座る文醜、それを見かねて諫める顔良。いつもどおり？の光景であつた。それを見て少し微笑みため息をつきながら、気分を入れ替える。

「そのつとおりですわよ！文醜さん！ワタクシがそちらの雑兵に倒されることなどありませんわ！」

「麗羽様！おお！よくぞ」無事であります！この老害をあまり心配させないで欲しいであります！」

「おかげりく姫、洛陽土産ありますか？」

「ぶ、文ちゃん！いい加減にしなつて！」

「あるわけ無いでしよう」

感極まつたのか、袁紹に飛びつく田豊。それを優しく受け止める袁紹。観光ではない事を分かつているのにボケ始める文醜に、それを叱る顔良。それを見て劉備たちとの会話や洛陽内での出来事によつて、イヤに痛んだ心が癒されるような気がした、そんな袁紹であつた。

「そろそろですわね、曹孟徳。彼女を上手くいなして早々に退場つてね。……自分で言つてなんんですけど寒いですわね」

イマは成らず

曹操、鮑信が徐榮の追撃に出たと、撤収間際の袁紹陣営に報告が上がる。そしてそれにも係らず、行われる袁紹軍撤退を聞いていてもたつても居られなくなつた将がいた、張邈である。

「麗羽殿！なぜ、華琳殿の呼びかけに答えないのですか！余りにも危険すぎます！」

「張邈さんに、確かあなたは衛茲さんでしたわね？」

「はっ！お久しううございます、本初殿」

声の方へ振り向けば、そこには張邈とその直属の部下である衛子許がいた。衛茲は黒髪を頭頂部で結つた、キツめの眼つきの少女であった。曹操とも仲がよく、今回の出兵の際にも曹操へと相当の援助を個人的にした程である。張邈と彼女は、追撃の準備を整えた曹操と共に長安方面へと進撃を行おうとしていた最中で、袁紹が突如退却を始めたのを聞いて袁紹にも参戦してもらおうと慌てて戻ってきたのである。

「未だ董卓軍残党は大きく、指揮系統に陰りが見えるとは言え、華琳殿の兵力では少々無理があるのですよ!?」

「張邈さん、ワタクシは曹操さんを止めましたわよ？そもそも董卓さん本人が居ないのに追撃する意味なんてないでしよう？中常侍は片付けましたが、帝を確保できなかつた今、これ以上は旗色が悪いのではなくて？」

「で、ですが！」

袁紹からしてみれば、これ以上本拠地を開けるわけにはいかない理由もある。異民族とのいざこざも片付かぬままにこの地に訪れたからだ。既に、それも無視できぬほどに大きくなつてきていたため、これ以上彼女が本拠地を離れるわけにはいかない。

「諄いですわ、ワタクシも領主。曹操さんも領主でしょう。そして自らのツケは自ら払うもの。これ以上は言わずとも分かりましょう？大義の前の小義、民草の危険を差し置いて感情に走る訳にはいかない」

「つー……では一つだけ教えてください！貴方は華琳殿をどう思つて居るのですか？」

「……貴方の思うように」

そうとだけ伝え、明確な答えもせぬまま袁紹はその場を立ち去ろうとする。それを止める術を持たぬ張邈はやはりそれを見送る。少し離れて諦めたのか、両名は背中合わせに歩き出す。

「……よろしいので？」

「曹操さんは負けませんわ、時代がそれを許さないのですもの。でも私は違う、縛られない。だから死ぬし、すぐに滅びることもある。だから只なぞるしか今は無いのですよ。貴方にも迷惑をかけますね」
ただ、今言えるのは確実に確執を残してしまったことだろう。とはいえ、領地を放つておけるはずもなく、帰らないという選択肢はない。弱みを他領主に見せるわけにもいかないので、詳しく話せるものでもない。結局の所起ころべくして起こつたのが今回のことである。

「引きりますわ、彼らの融和策も進めなければなりませんことですし、彼らの一部を黒騎に組み込みたい理由もあります」

来たるべき時に備えて、勝てなくとも一定以上の力をを見せねば、曹操は彼女の首を斬るだろう。滅びは避けられずとも、死だけは避けられる。それだけを信じていて。とは言え、彼女も生きるか死ぬかよりも、心は既に違う場所に向いてしまっている。



「……良かつたんですか？」

黒騎の中央に居ればまた、袁紹はこうして尋ねられる。そこまで酷い顔だというのか？ そう思わずにはいられなかつた。其れゆえだろう、少しばかり顔をしかめてしまう。

「私達の力が無いばかりにご免なさい」

「それを言うならワタクシの力が無かつたからこうなつたのですけれども？」

袁紹からしてみて、正直に言えば彼女はやはりすごいと思う。どれほど心が広ければ、今のこの状況で怨敵を気遣う余裕などが出来るの

だろうか？彼女の言は、董仲穎の力がなかつたからこうして戦争が起
こつてしまつたとこれを恥、謝つてゐるのである。

「あ、いえ、そういう意味で言つた訳ではないのですけど……」

「分かつてしますわ、これは子供じみた八つ当たり。軽く流してくださいまし。ふう、お互ひ無力が嫌になりますわね。何れも此れも見せ掛けばかりの権力ばかり」

彼女であれば氣を使う必要がない、本来の自分ではない、いつも氣を遣う猫かぶりをしなくてもいい。まず彼女は袁紹のこれを言いふらすこともしないとの確信もある、更にしても意味がないと分かつている。

「もう少し皆、仲良く出来たらもつと漢は良くなつたんでしょうか？」
「貴女は優しいですわね、心で抑えるのではなくワタクシと共にあつても自らの不幸を嘆こうともしない」

「私もそこまで出来た人ではないですよ？ただ、貴女を見て、この人も私みたいに戦いたくないんだつて。私が優しいなら、きっと貴女も優しいんだと思います、こうして友達の役に立てないことを悔いているぐらいですから」

苦笑いの様に微笑む董仲穎を見て、少しばかり彼女の良い様に捉え過ぎだと思った。元々、ただこんな場所で死にたくないから、良い様に身の回りの物を使ってやろうとの考えが、袁紹の中核にあつた。今もそうであるかと言えば、既に色々と情がわいてしまつてゐるので、違うと断言できるが、やはりそこまで崇高な彼女の様に崇高な心からは始まつていない。

「……仲穎さん、貴方に良いモノをあげましよう、きっと貴方が望む全てを手に入れる力になりますわ」



『主力軍を彼女に委任する』

袁家に激震が走つた。勿論直下の臣が袁紹に問いただせば、『お一

ほつほつほー』で誤魔化される。袁紹は直属の黒騎以外のすべてを新しく登用した者に預けたのである。これには全ての者がやはり狂っていると袁紹を嘲笑つた。

『今現在、国力は涼州の3倍、現状では他勢力を遙かに凌ぐ財力と動員力がありますわ』

しかも、その人物はとても武力に秀でているように見えない。多くの臣下が見切りを付けようと眞面目に考えた。だが、そうはならなかつた。彼らが諫言状を束ねて袁紹の元へ届けるよりも先に、件の彼女は瞬く間に領内の異民族をまとめ上げると、それを袁紹軍へと吸収して見せたのである。

『貴方の相方を黒騎の参謀に置こうかと思つておりましたが、貴方の隣につけましよう』

勿論、それを良く思わないモノもいる。が、袁紹の考えなしにも思える、『では、貴方に同じことをやらせてみましよう』との一声でこれらもすぐに鎮静化する。新参が与えられた地位と権力は確かに魅力だが、誰もあの仕事量はこなしたくはない。凡人には捌ける量ではないと分かつていてからである。

「……で、貴方は何をしているのかしら？ 袁本初殿？」

ふと賈団が執務を片づける傍ら、そこで仕事をしているはずの新たな主を見る。どう見ても仕事は何もしていない。むしろ、彼女は董卓を膝に乗せ、ぬいぐるみのように抱きしめると、董卓の頭に顎を乗せ和んでいる。

「……気持ちいいですわ」

子供の暖かさと、なんかこう落ち着く感じが、と付け加えると董卓の頬を指先でむに。董卓も苦笑いしながらなされるままに、そこに座る。ちなみに董卓は誰が何と言おうと成人である。

「あつ、そう……つていうと思ったか！ 何やつてんのよアンタは!? 仕事、これアンタの仕事だから！」

竹箇の束を片づけながら、それを持ち上げ、ひらひらとさせる。袁紹はそれをチラリと見るだけで、再び董卓をむにする。それを見て、賈団は地囃駄を踏み、それを申し訳なさそうに董卓が再び見る。これ

が最近の袁紹たち三人の日課であった。

「……アンタねえ、いまだんなふうに自らが呼ばれているのか知つているのかしら？」

「キラキラお飾りですわ」

「明らかな侮蔑と知つていながら、どうしてそんな御座なりなのよ？」

「君臨すれども統治はせずつて中々にいい言葉ではありませんか？」

「アンタ其れ無職だから」

鼻でそれを笑うと、お菓子でも食べましようかねえーとやる気なさげに執務室を出る。それを見て賈団はこの国乗つ取つてやろうかと敢えて聞こえる呟きを吐く。それに振り向くことさえせず、手を上げてひらひらさせるだけで袁紹は立ち去る。これは、両者ともに出来る訳がないと分かつていてからだ。

袁紹の治める地は袁紹の名のもとに集つた清流派の生き残りで政治が回されている。袁紹ありきの統治である。確かに賈団は相当の権限を得ているが、これら清流派の政治家たちの意見全てを跳ね除けることは出来ない。しかし、袁紹の彼らに對しての影響力はすさまじいモノで、彼女彼らの声をほぼ全て抑えることが出来る。とは言え、今現状はやり過ぎなことをしている自覚があるため、これ以上の要求は流石にしないのであるが。

賈団の権力は実力に伴つたものではあるが、そこは袁紹という存在があつて初めて成り立つものなのだ。

「本初さん、うちの賈団をあまりいじめないで下さいね？」
「いじめているように見えます？」

「いえ、見えませんよ」

くすくすと笑いながら袁紹の後を歩く董卓。彼女からしてみても当然二人がじやれているのは分かつていて、賈団も信用されて仕事を任せられている。そうと分かつていてからこそ、袁紹へと一応の文句をつけてはいるが、正直自らの力を思う存分に活用できる現状は、彼女にとつても非常に心踊らされるものがあるのであるのだ。

「つて、何が三倍よ!!」

ふと、和みながら茶菓子を食べていれば、再び賈団が現れる。どうやら、何か気付いたようであるが、正直意味が分からぬのが袁紹の心境である。で、何が三倍なの？

「これよこれ！ふざけんな、こんにやろう！これで三倍、三倍なわけあるか!!」

と、見えられたのは様々な数値、兵の動員力やら、経済力やら国力やらである。具体的に現状で分かつてある調査を終えた総合数値であつた。

「いい？これ、まず資本力ね？単純計算で涼州の20倍」

一つを指さす、ご丁寧に涼州の数値も新たに書き込まれている。

「で、動員力ね、15倍」

赤筆で態々何本か横に線が引かれ、一見棒グラフのように見えなくもないモノがある。

「で、好きに動かせる、資金ね、34倍」

「……で？」

仲良く袁紹と董卓が頭をかしげる。多くて何か悪いことでもあるのだろうか？とは袁紹談である。生憎と董卓も袁紹も軍師達と比べてしまえば、おつむは優れているほうではない。何が言いたいのか具体的に言われないと理解できないのだ。

「今現在の漢でこれほど富んだ国はいません、おわかりかしら？」

「それで、なんで怒っているのかしら？良いことではありませんか？」

「詠ちゃん？どうしちゃったの？」

「何が、強国を相手にするには足りないよ！いや割と本気で、これだけあれば蹂躪できるわ」

あまりの国力差に急に怒りが収まり、素面になる賈団。「ボクの努力って、なんだつたのかしら」とブツブツと呟き割と本気で落ち込んでいる。まあ、要するに一周の絶望を通り越して怒りが湧いてきて思わず駆け込んできただけである。

ついでに言えば、袁紹がこれでは勝てないと呟いた曹操や孫家、劉備軍が恐ろしくなる。あいつらどんだけ化け物いんのよ。袁紹は

そしてこれを応える。

「呂布さんには敵わないにしても、それに順じた武将が何人もいる」
それを聞けば賈団は納得してしまう。確かに袁家は人材こそ豊富
であるが、残念ながら突き抜けた存在はそこまで多くない。顏良文醜
は確かに強いため、劉備軍の主力の手にかかるべ一撃だと聞いて思わず
賈団も「あつそれは無理だわ」と告げるほどである。

そしてこの日からお茶飲み仲間に賈団も加わるのであつた。

「とりあえず、できる限りのことやつてれば、なるようになるで
しょ」

と、一端の諦めの境地を手に入れたのであつた。



賈団は思った、正直あの目に痛い袁紹軍の鎧はどうにかならないモノかと。そして、袁紹が使い分けている黒色の鎧を見ても思った。何故そちらに統一しなかつたのかと。一応聞いてみたが、納得のいく回答は得られなかつた。だがしかし、効果的だとは思う。晴れの日だけは。

実際に袁紹軍はあの時いやにピカピカしていたので、見つけやすかつたが、狙い難かつた。ただ、絶対に伏兵は出来ないとは思つてい
る。あんな目立つ伏兵が居てたまるかと。しかも、あの鎧、真鍮鍍金
という二層の構造が功を成してか、実は高性能だ。他軍の一般兵には
ない防御能力を持つてゐる、他軍が木をつないただけの鎧であるから
仕方がないと言えば仕方がない。あの鍍金は火矢に対しても少々の
意味があるのであるのだ。

だからこそ頭が痛い。財政の圧迫になる可能性が大いにあるから
だ。だがしかし、先ほど得た数値を見てそれは涼州基準であることに
気付く。そして、冀州の財力であれば何も問題ないことに。そう、当
初よりの節制計画全てがほぼ必要のないモノとなつたのだ。こうし
て、色々と考えてゐるうちにもこの州は黒字となつてゐる。何がどう
なつてこうなつたのかは分からぬが、とりあえず、袁紹には商才？

のようないモノか、その何か、そういうつた良く分からぬ才能があるのかもしれない。

ふとここで賈団は気付く、確かに袁家にはずば抜けてスゴイ武将居ないけど、袁紹もある意味色々と凄くない？と。此処で何度も考へる、普通つて何だろうと。いや、此処もすごいけど確かにそれを一瞬でひっくり返す奴らがいるのだ。何それ怖い。まともな人間つていなかつたのであるが。荀彧としては新参に良い所取りをされてい

ないのかしらとも思った。

が、実際には賈団、貴方もどちらかといえればヤバい側の人間ですから。袁紹がこの話を聞いていればそう思つただろう。

賈団は無駄になつてしまつた竹筒を端に避けると、今日のお茶菓子何かしらとテクテクと歩いてゆく。完全な平和ボケであつた。



董卓はいつも通り袁紹と行動を共にし、せくせくと茶酌み娘に精を出していた。だがしかし、この見た目でこの娘も非常にヤバい部類の人間である。

彼女は、今日は林檎のお菓子でも作ろうと拳で皮をむいたそれを握る。くしやりと容易く碎けたリンゴの果汁と果肉が盆の中に広がる。その中より種や余分な部分を取り出し、はちみつを加え、饅頭の生地で包む。林檎饅頭である。

そして出来上がつたそれを持ち、袁紹の元へ向かう。時折田豊や二武将、許攸も訪れる。そのためいつも多くお菓子は作つてゐる。本来なら荀彧も此処に加わつても良いのだが、董卓は彼女をあまり見ることはない。荀彧は董卓戦にて曹操に勧誘され以来、執務にも力が入らなくなつていたのである。元より袁紹との仲は不仲とまで行かなくとも、不満しかない荀彧であつた。しかも冀州は文官がそろいすぎて、荀彧にとつてやることのない面白みのない場所である。

軍事に関してはあまり袁紹は荀彧に関わらせていない。袁紹としてはいなくなる可能性に高い有名武将にそんな大事なものを作らせたくないつたのであるが。荀彧としては新参に良い所取りをされてい

る現状である。やる気なぞ出ようはずもなかつた。

こうして、荀彧の出奔が加速していくのである。とは言え、彼女が賈団に大規模な軍權を任せていなくとも荀彧は曹操に引き抜かれていたことは間違いないのであるが。荀彧にとつてはこの国は彼女の実力を振るうには全てが整いすぎているのである。これでは思うようく羽ばたけぬと未だ政治に成長の余地のある曹操の元へ赴こうとするのは彼女にとつてはごく自然なことであつた。

ちなみに、彼女にとつては大したことがない仕事量であつたが、彼女が抜けた穴を埋めるのには文官を新たに8人用意する必要があつたことを明記しておく。